

白虎隊士飯沼貞吉長州滞在説の
物証発見と諸説の解明

飯沼 一元

第一章 はじめに

筆者は飯盛山で自刃した白虎隊士の中で、ただ一人生き残った飯沼貞吉の孫に当たる。

貞吉に関しては「自刃に失敗したのを恥じて、生涯一度も会津に帰らなかった」とか、「白虎隊の真実は誰にも分からない永遠の謎」という人もいる。

貞吉が長州藩士^{ならざらいぞう}榎崎頼三に養育されたという怪文書が筆者の元に届いたのは平成九年（一九九七）の春。送り主は堀田節夫氏（故人、西郷頼母研究会主査）。

筆者が貞吉研究を開始した理由の一つは、これらが誤解であることを証明したかったからである。貞吉は「死に損ない」として故郷会津からは白い目で見られ、「生き返るような切腹の仕方は会津武士らしくない」と新聞会津日報上で非難され、筆者は子供の頃「わざとあつさり喉を突いた」などと黒板に書かれ悔しい思いをした。あるうことか「宿敵長州の世話になった」などは恥の上塗りのようなもので、到底受け入れることができない。

筆者の貞吉研究の主目的は、

①死に損なった貞吉が生きる希望を見出したきつか

けは何か？

②通信省に勤務し電信の敷設に関わり、日清戦争では自ら開発主導した会津^が碍子約五万個を朝鮮の戦場に命がけで敷設し、勝利の影の立役者となった（文献①）のはなぜか？

の二点である。

足掛け二〇年の調査結果、貞吉長州滞在説は史実であると確信するに至った（文献②）。

つまり、榎崎頼三との邂逅が「死ぬことより如何に生きるか」が大切であることを悟り、頼三が手渡した『西洋事情』（福澤諭吉著）との出会いが通信省入省の切掛けとなったのである。

しかし、貞吉長州滞在説は物証なしのでつち上げで、真相は「護国寺で謹慎した」との主張をネット上に公開する人や出版物に記載する人もある（文献③）。

貞吉長州滞在説は単なる一個人の問題ではない。白虎隊はあまりにも有名で、鶴ヶ城と共に会津観光の二枚看板である。会津人としては長州の世話になつて欲しくないし、一方の長州人としては貞吉を養育したことを美談として、会津との友好を進めたいという思惑がある。

「長州滞在説」と「護国寺謹慎説」は時期的に三ヶ

第二章 飯沼貞吉の足取り

一、飯沼家のこと（詳細は文献④貞吉本『白虎隊士飯沼貞吉の回生』参照）

貞吉は明治四年（一八七二）に名前を貞雄に変えた。筆者は貞雄が晩年を過ごした仙台市の飯沼家で生まれ、育った。家には貞雄と妻連子の肖像画が掛けてあった（図一）。

飯沼家の家系図を西郷家および山川家と関連付けて示す（図二）。貞吉の父親は時衛一正で、会津戦争当初は朱雀隊小隊頭で、後青龍隊中隊頭となった。母親は文で、玉章^{たますざ}という雅号を持つ歌詠みだった。飯沼一正には三人の男子があり、長男源八は朱雀隊、貞吉は



連子（貞雄夫人）
S.KAWAGUCHI
明治45年（1912）



飯沼貞雄肖像画
S.KAWAGUCHI
明治44年（1911）

図1 飯沼貞雄とれんの肖像画

二男で白虎隊、三男^{せきや}関弥は戊辰戦争の時は六歳である。

飯沼家は父方が西郷頼母、母方が山川家と親戚で、一正の妹は、家老西郷頼母の妻千重子で会津戦争では頼母の妹二人・娘五人を含め一族二〇人が自邸で自刃した。辞世の句



図3 貞吉が隠棲していた不動堂

九月二二日の鶴ヶ城開城後、飯沼家の若党（家僕）藤太が不動堂にいる貞吉を探し当てた。この間の経緯は『白虎隊事

た。看病に当たったのは武具役人印出新蔵の妻ハツである。

二、自刃後の貞吉
慶応四年（一八六八）八月二二日に白虎士中二番隊四二名は藩主松平容保公の護衛として戸ノ口原に出陣し、翌二三日に篠田隊一七名が飯盛山で自刃した。この中で唯一生き残ったのが貞吉である。
貞吉は自刃後約一ヶ月間、塩川・喜多方・沼尻の不動堂（図3）で敵の手から逃れながら、傷を癒していた。看病に当たったのは武具役人印出新蔵の妻ハツである。

「母の諫めし事」というのは、出陣に際して贈られた「あずさ弓」の歌のことである。
梓弓向ふ矢さきはしげくとも
引きな返へしそ武士の道
玉章
「潔く死んでくる」つもりが自分だけ生き残って「引き返してしまった」ことが不幸中の不幸で、こうなった以上、傷を癒して再度戦うことが残された唯一の道と考えていた。

氏は此の難を避け、喜多方村に至り、庄屋池上某の宅に寄り、日々治療を加え、心潜に嘆して曰く、「吾出陣の際、母の諫めし事あり。今疵のあればとて、ひとたび飯盛山の朝露となり、蘇りしこそ却て不幸中の不幸なり。然れども、事茲に至りては速に疵を癒し、忍びざるに忍び、堪えざるに堪え、尚奮戦後事の策あらん」（『事蹟』より）

貞吉の避難生活中の心情は、次の記述から読み取ることができる。
貞吉の避難生活中の心情は、次の記述から読み取ることができる。

『文獻⑤、以下事蹟と略記』に詳しい。なお、『事蹟』の貞吉関連事項は、著者中村謙が、明治二六年（一八九三）八月に東京で貞雄を取材した結果を取りまとめたもので、国会図書館のデジタルコレクションで誰でもネット閲覧できる。

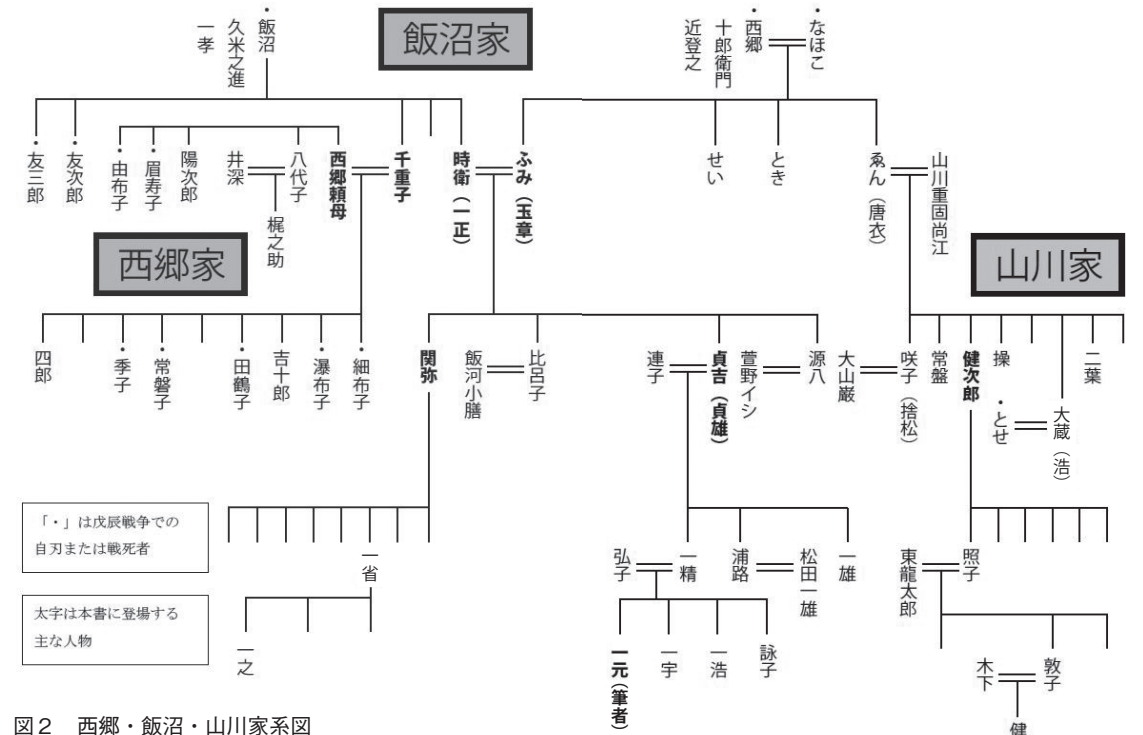


図2 西郷・飯沼・山川家系図

なよ竹の風にまかする身ながらも
たわまぬ節はありとこそ聞け
の「奈与竹の碑」は有名である。
なお、筆者はこの歌の意味を、やがてこの場に踏み込んでくる敵を想定し、「あなた方の思うようにはなりませんよ」と宣言したものと解釈している。
貞吉の母ふみの姉ふん（雅号唐衣）は山川家に嫁ぎ、その子供たちが有名な山川一族である。貞吉と山川浩・健次郎、および陸軍大将大山巖に嫁いだ大山捨松とは従兄妹同士である。なお、捨松は津田梅子（令和六年発行新五千円札の顔）と共に海外留学し、後に鹿鳴館の華として活躍した。弟の関弥は貞吉の九歳下だが、後に会津藩の家令（事務局長）を務め、山川健次郎監修『会津戊辰戦史』（文獻⑬）を発刊し、自叙伝『藻汐草』（文獻⑫）を残した。
会津戦争時（慶応四年（一八六八））の飯沼家では、五月一日、白河口の戦いで貞吉の叔父友三郎（二二歳）が朱雀隊士として出陣して戦死した。このときの会津藩総督は西郷頼母、時衛一正は四二歳で朱雀隊の小隊長として白河に出陣したが、大敗を喫した。この時に長州藩を指揮して大勝したのは、長州藩第一大隊二番中隊司令檜崎頼三（二二歳）である。

母ふみとの再会

その後、貞吉は母・ふみとの再会を果たす。

再会の様子について、平石本『会津戊辰戦史』（文献⑥）は簡単にふれている。

親に再会はしたが、何とも申し訳のない感じがして、暫く無言であった：（『平石本』より）

この「申し訳ない」気持ちには、「引きな返しそ」を守れなかった無念であり、飯沼家の名誉を傷つけたという思いもあろう。

一方、ふみにしてみれば、我が子の首に巻かれた包帯を見つめ、

（無事でいてくれた。生きていてくれたのだ）

と我が子が愛おしく、抱き締めてやりたい衝動に駆られただろうが、西郷千重子一家の凄惨な最期を思い起こすと、自分達だけが助かったことへの後ろめたさもあつてそうもいかなかったのだろう。これらが「暫く無言」の背景であろう。

その後、貞吉は塩川郊外の下遠田しもとうだの星初太郎宅に移る。理由は、

「当時氏の患部は医薬に乏しきと時気の変遷によりて益々鼻爛し、飲食呼吸漸くにして体勢を養う

に至らざりし」（『事蹟』より）

貞吉の傷は「鼻爛」とあるので喉から鼻まで化膿するほど悪化しており、その治療のために星家に約二週間滞在した。

なお、下遠田は藤太の出身地で、西郷頼母家出入りの職人が住んでいた。

貞吉の日新館の同級生であった河原勝太郎の弟河原勝治が星家を訪れていた記録がある。

戊辰十月三日に叔父の原惣五郎が没し、翌日埋葬、その翌々日（十月六日）に塩川村の西隣下遠田に落ち着いた……下遠田にて白虎隊蘇生者飯沼貞吉氏に遇いしが、咽喉の処に猶お白包帯をなし居られたり、其後訪うて八月廿三日弁天山（飯盛山のこと）の話

を聞かんとする内、疵癒えたりと見え猪苗代へ行かれたり。（『戊辰會津戦争回想談』文献⑦より）
勝治は会津藩軍事奉行河原善左衛門の二男で、戊辰戦争の貴重な証言を後世に遺した人物である。貞吉は一〇月六日には星家にいたが、間もなく猪苗代に向かったことが分かる。

三・猪苗代謹慎所への出頭―白虎隊戦友と父との再会

氏は家僕藤太に伴われ、城中に入る。

（『事蹟』より）

貞吉は藤太に伴われ猪苗代謹慎所に向かった。

この城中とは亀ヶ城謹慎所のことである。会津藩は若松に鶴ヶ城、猪苗代に亀ヶ城を構えていた。亀ヶ城は八月二一日頃に焼失し、降伏後は猪苗代の謹慎所となった。

佐瀬三餘が遺族と生き残りの白虎隊士たちの調査をもとに書き上げた『白虎隊十九士列伝の乾・坤』の手書き原稿には、次のような一節があることが文献⑧に紹介されている。

蘇生者飯沼氏ガ乱後幾クバクモナク亀ヶ城謹慎所ニ来リ、自刃ノ瘡痕末タ全ク癒ヘサル喉ヲ以ッテ諸君ニ向ヘ口述モシ、飯盛山頭受難ノ話題ニ及ヒ諸君初メテ之ヲ聴キ一聴一涙……

亀ヶ城謹慎所というのは、実は一カ所ではない。猪苗代地区にある民家や寺が収容所とされ、藩士たちはそれぞれの所属部隊ごとに別々の場所で謹慎させられていた。

佐瀬は、貞吉と会ったのは酒井峰治、遠山雄午、藤沢啓次、庄田保鉄の四人としている。酒井峰治は『戊辰戦争実歴談』で、自分が収容されたのは猪苗代の岡

部新助の家と記しているので、貞吉は岡部邸で四人の戦友に会ったことになる。
彼らは戸の口原の戦闘では、貞吉の属した篠田隊とは別行動をとり、飯盛山には行かずに帰城したので、飯盛山集団自刃については知らなかった。貞吉の供述は衝撃的だったと思われる。再会した彼らは、生死を賭けたあの日の体験をお互いに語り合ったことだろう。

白虎隊の悲劇の実態をはじめて公にしたのは、明治二年四月に発行されたわが国最初の新聞『天理可樂怖』である。
「此に御談あり。一の老嫗ありて其の子の行方を知らず」で始まり、「何れも白虎隊に悉く死に就き、一人蘇生せるに因つて、外十五人の姓名も詳らかにしける由なり。」

（『テリカラフ』より）
この記事は、貞吉がこの時に戦友に話した内容が、新聞記者の知るところとなって掲載された。

父との再会

氏の父また城中に在りて、共に再会の胸襟を語る。

（『事蹟』より）

番 号	出発日	出発地	護送対象	引率者	到着日	到着地	引渡し先
第一陣	10月12日	猪苗代	脱走人460名	長州・大垣	10月24日	東京	各出身藩
第二陣	10月19日	護国寺	藩公・重役15名	佐賀	11月3日	東京	因州藩
第三陣	12月12日	猪苗代	幹部13人	小倉	12月26日	東京	堀田・細川
第四陣	1月3～5日	塩川	城外組1744人	越前・加州	1月15～17日	高田	高田藩
第五陣	1月7～13日	猪苗代	城内組3254人	小倉・加州	1月19～27日	東京	護国寺等
第六陣	2月29日	若松	照姫26人	紀州	3月10日	東京	紀州邸等
第七陣	6月16日	青木村	病兵900人		7月初旬	東京	芝増上寺

図5 会津戦争降人者の東京護送状況

二、護国寺謹慎説の検証

小倉藩の護送に関しては『会津少年郡長正自刃の真相』（宇都宮泰長著・文献⑪）の巻末に付録として七百人余の護送人名簿（活字）と護送状況が記載されている。出発日は明治二年一月一―一三日で護国寺到着まで二日かかる。この中に飯沼時衛と飯沼貞吉が並んで記載されている。また、このリストには途中で脱走した者五八人に◇印が付いているが、この二人には◇印は付いていない。護送途中脱走の有無を付記したということは、猪

苗代での降人の送り出しと護国寺の受入れとで、それぞれ、点呼又は面通しが実施され照合したことを意味する。

なお、リストに青龍隊の山田善八の記載があるが、白虎隊士は何故か貞吉以外の記載がない。白虎隊は士中、寄合、足輕の三隊で構成され、当初約三〇〇名だったが戦死者が出て減少し猪苗代で謹慎したのは約二五〇名であった。

図6に護国寺に到着した会津降人飯沼隊の人別帳を示す。

飯沼隊の見出しがあり、冒頭に飯沼時衛、一五番目に山田善八、下段の右から八番目に飯沼貞吉が毛筆で記載されている。貞吉の次は武井寛平でその次は芦沢隊となっている。

貞吉の弟関弥が書き残した自叙伝『藻汐艸』（文献⑫）には、父時衛について

降伏後は猪苗代に謹慎、江戸に護送せられては護国寺で謹慎せられた（『藻汐艸』より）

と明記されており、護送リストと人別帳の記載どおりである。

山田善八についても調べてみると図7に示すように、青龍隊に所属し護国寺に謹慎したと記載されている。



図4 穂積朝春の白虎隊自刃の図（会津若松市所蔵）

虎隊自刃の図」なのである（『河北新報』文献⑨より）。

一正の青龍隊の配下に、一瀬勘助という人物がいた。勘助は弟重村と共に、会津では高名な絵師に付いて学んだ絵の達人だった。絵師としての画号は、穂積朝春という。彼は貞吉の話聞き、白虎隊自刃の図を残したのである（図4）。

なお、この絵は会津若松市に所蔵されている。

第三章 会津戦争降人の東京への護送

一、東京への護送方法

さて、ここから「護国寺謹慎」か「長州滞在」かの鍵を握る史実解明の重要場面になる。

図5に会津戦争降人（降伏して捕虜となった人）の東京護送状況を示す（文献⑩）。降人には会津藩士と会津支援に駆け付けた会津藩以外の佐幕派諸藩隊士がある。一正の属する青龍隊は第五陣の猪苗代謹慎者約三千名に含まれ、小倉藩（現在の福岡県・当時は小笠原氏藩主）が護国寺への護送担当となった。一方、長州藩は第一陣の脱走人四六〇余名の護送担当である。

穂積朝春に自刃劇を語る

氏（飯沼貞吉）父子が謹慎中、家厳（父のこと）の隊に頗る画を善くするものがあつた。その者の望みに任せて、氏は飯盛山に於ける白虎隊自刃の時の光景を語りて聞かせる。この実話に基づいて、その者が唐紙の全面に描いたものが、即ちそれ（白

「憎つくき長州に今度は我が子までさらわれる。運命のいたずらとはいえ、会津に顔向けできないばかりか絶対にあってはならない」。時衛は考え抜いた後、部下に貞吉の替え玉役を命じた。面識が無いのだから、点呼で小倉藩が替え玉を見破ることは不可能である。更に重要なことは、人別帳に貞吉を記載すること、貞吉の長州行を「隠蔽し偽装できる」事である。つまり、このリストは貞吉の長州行を否定する証拠を残すことにより、飯沼一族および会津人仲間迷惑が掛からないように配慮された時衛の意図的計略だった。

つまり、貞吉をリストに加えたのは時衛本人なのである。なぜか？
父子は一〇月に猪苗代謹慎所で再会したが、その後は一度も会っていないので、三ヵ月後のこの時期には貞吉は行方不明になっていたと考えられる。

もしや第一陣で長州藩に護送されたかもしれない。時衛には大敗した五月一日の白河口の戦いが鮮明に蘇ったであろう。朱雀一番隊小隊頭時衛はこの日、鳥羽伏見の戦いで戦死した弟友次郎に加え末弟の友三郎（朱雀隊）を失い、総大将西郷頼母が敵陣突入しようとするのを咄嗟に諫めて馬に鞭打ち退却させたのだ（文献⑬）。

では、二五〇名の白虎隊士の中で何故貞吉だけが記載されたのか？
この疑問に答えるためには、小倉藩リストと護国寺リストがどのようにして作成されたかを検討する必要

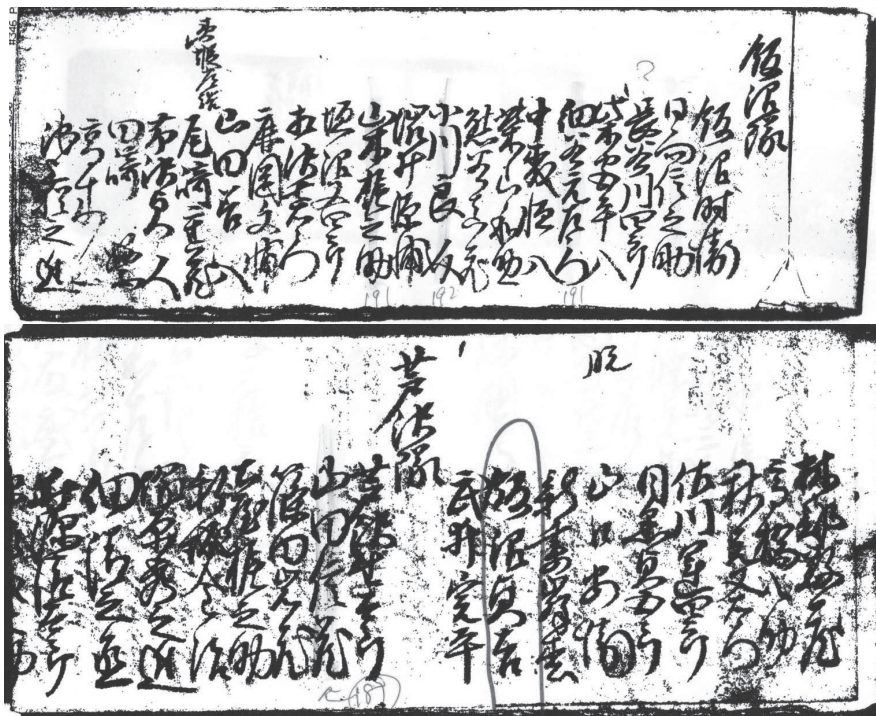


図6 会津降人飯沼隊の護国寺人別帳（白虎隊記念館所蔵）

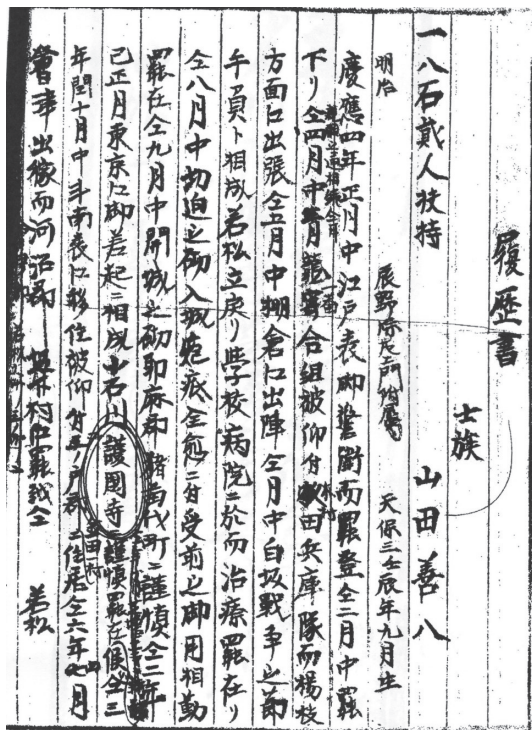


図7 青龍隊山田善八の履歴書（白虎隊記念館所蔵）

がある。
七〇〇余名の会津藩降人リストを作成するのは大変である。まして、第五陣は三〇〇〇余名である。護送担当藩が分担して作成するが、面識の全く無い人物の場合「嘘を見破る」には多大な手間がかかる。戦争が終わった各藩とも一刻も早く郷里に帰って家族に会いたいに違いない。
そこで、リストは会津藩幹部に命じて作成させるのが得策である。青龍隊の飯沼隊については中隊頭の飯沼時衛が作成したとするのが最も合理的な解釈である。

猪苗代謹慎の三ヵ月は仕事もなく暇を持て余していたことだろう。部下の一人に替え玉役引受けを説得するぐらい朝飯前である。

なお、この日の戦闘状況について頼三は次のように記している。

五月朔日 朝晴れ、夕雨 薩・大垣申合せ、朝七時半時発陣。大砲隊は本道に出し、薩五番隊、我藩二番隊、原田良伊隊、大垣一中隊は原街道を進み、薩二小隊二番四番也畑街道、棚倉道を進む。六時、二点より本道戦争始む。六時、四点より原畑両街道より押寄せ、激戦。時を移し十二時、進んで白河城を乗取る。直様返して本道の賊を左右より挟み応戦、賊七百余を倒す。手負い亦大凡五六百人と土（土佐）人傳唱す。賊は、会兵、徳川純義隊、新選組、日向隊、朱雀隊及び歩兵等合せて千余、仙賊（仙台藩）凡そ二千人。味方長二番隊、予、原口台場一番先鋒乗取り、台場において右手を傷つく。而し却て快し。
三番隊戦死岡勝熊、深手桑原興作、寺内鴻二郎、伊山栄三郎……（『陣中日記』より）（文献⑭）
会津藩の戦死者は数百人といわれるが、敵長州の死者は一名である。

〔付記〕筆者が文献⑪の宇都宮著『会津少年郡長正

自刃の真相』を入手した理由は、郡長正は飯沼家の遠戚に当たること及び小倉留学中に自刃したからである。郡長正は、藩主松平容保公に代わって会津戦争の責任をとって切腹した家老萱野権兵衛の次男で、飯沼源八の妻イシの実兄に当たる。長正（当時一六歳）は明治三年小倉藩の藩校育徳館に会津藩からの集団留学生の一人として派遣されたが翌明治四年に自刃した。作家狭間佑行氏はこの自刃を巡る小説『会津戦争』を発刊した。筋書は「寮の食事が不味いという不満を母親宛の手紙にしたためたことが発覚し、食客のくせに生意気だとなじられたため自刃した」となっている。宇都宮氏もこの小説拡販に加担したが、後日、「事実と違う不見識」と非難され、真相究明のため会津を訪問調査し、非を認めた。宇都宮氏の先祖は小笠原藩士であり、この低レベルの小説が与えた誤解を少しでも解くために小倉藩史を徹底調査し、護送者リストを発見、本書『自刃の真相』を発刊したと述べている。

しかし、会津にはこの小説を鵜呑みにして史実と誤解している人がいまだに散見されるのは残念である。なお、筆者の長正自刃理由の解釈は、文献④（『貞吉本』の二六〇ページに記載した）。

三、長州滞在説の検証

猪苗代謹慎所以降の貞吉の足跡について、『事蹟』は以下の数行しか記していない。

後、藩主の東京に移らるるに当たり、氏も亦護送せられて謹慎の身となり、明治三年十一月、藩主学生を諸方へ遣わさるるに当たり、氏も亦選れて静岡に至り、林三郎の塾に入る。居る事一年、留学生廃せらるるに当たりて藤澤次謙に就く。同氏出仕の身となるに及んで、共に東京に至り、同氏の斡旋に依り電信修技校に入り、遂に業を卒え、職を技術に奉じ、今猶通信省の電信建築署長たり。

（『事蹟』より）
貞吉は明治三年（一八七〇）に静岡の林三郎塾（後の静岡学問所）に入った。つまり、明治元年一〇月、三年一〇月の二年間が空白（行方不明）ということになる。

「藩主の東京に移らるるに当たり、氏も亦護送せられて謹慎の身となり」は護送第二陣の松平容保公他重役の東京護送（一〇月一九日）に近い時期、即ち一〇月一二日出発の第一陣を示唆している。

そして、第一陣の護送について、長州藩第一大隊二番中隊司令檜崎頼三は『毛利家文庫藩履』（檜崎頼三

斗南移封説

飯沼時衛一正（時衛は通称で家督名は代々継承してきた猪兵衛）一家は謹慎解除後の明治三年に斗南（青森県五戸）に移封となる。大著『流れる五戸川』（文献⑮）の著者三浦栄一氏は、飯沼家の戸籍を調べ、以下のように記載している。

戸籍台帳には次の通り書き綴られている。
五戸村40番戸（12人） 飯沼源八24 曾祖母みの
87 祖母こう67 父隠居猪兵衛47 母ふみ43 二
男貞吉21 長女ひろ15 三男関弥11 大叔父留蔵61
同妻よし48 同長男留四郎14 ヶ長女ひさ7

貞吉（後貞雄）は静岡に留学中で五戸にはいないようだ。当時、名前を届けておくと、お金とお米がもらえたからであつた。西越にも同じ例がある。

（『流れる五戸川』より）
戸籍登録を申請したのは時衛である。替え玉作戦で成功した彼は、斗南でも貞吉名を利用して扶持米の増量に役立てたのであろう。

この戸籍から「貞吉は斗南に行った」と主張する人がいるが、そうでないことは家族全員が知っているのだから、論外である。

陣中日記（文献⑭の一部）に以下のように報告している。

同月（明治元年一〇月）総督府より降兵護送の命之有り、猪苗代に帰り諸藩の脱兵四百六十余人を請取り、同二四日、千住宿に帰着、降兵隊長二四人を呼び出し、苦戦の労を慰し、藩々の重役へ残らず引渡し的一件、滞り無く相済ませ差し届出候事。

（『陣中日記』より）
ここで言う「諸藩の脱兵四百六十余人」とは会津に加担した旧幕兵の内、鶴ヶ城にて籠城戦を会津兵と共に戦い降伏した兵を指す。即ち、第三歩兵隊（隊長、旧旗本五〇〇〇石、幕府歩兵頭加藤平内）約二〇〇人、草風隊（隊長、旧旗本五〇〇〇石、天野加賀守花蔭）約二〇〇人、凌霜隊（郡上藩、隊長朝比奈茂吉）二六人他合計約四六〇人のことである。勿論、会津兵は含まれていない。出発は一〇月一二日、護送責任者は長州藩士檜崎頼三、東京到着は一〇月二四日である。

総勢五〇〇〇人もの降人を護送するには、護送体制と共に謹慎預かり体制を決めなければならない。旧幕府脱走兵の謹慎先は元の所属藩に早々と決定されたので、護送の第一陣となった。一方、会津兵は人数が多いので、受け入れ体制が決まるまでに時間がかかっ

た。その間の約三カ月は猪苗代および塩川に待機させられ、護送は翌年一月以降になったのである。

さらに、注目すべき事項として、

一〇月二日、三番隊山形宗之介へご用金（是脱走人護送金也）守衛して若松に返す。篠田竹蔵、岡八十吉同道飛駕行我藩脱走人の護送令書を持し行也。

（『陣中日記』より）

つまり、猪苗代からの引率は篠田と岡に代行させ、頼三自身は東京で待機し、一〇月二四日に千住で四六〇余人の降人を出迎え、各藩に引き渡した。

第四章 長州への連行

檜崎頼三は脱走兵を各藩に引き渡した後について『陣中日記』に以下のように記載している。

一、同一〇月二五日、東京に凱旋、行宮へ罷り出、兵隊一統へ天顔拝謁、御酒頂戴、且つ、会城へ突入の功により羅紗軍服頂戴、仰せ付けられ候事。
一、十一月西京を發し、二五日浪花出港、二九日三田尻着、一二月一日山口着、御屋形罷り出、敬親御拝謁仰せ付けられ、万事相済み、同二日帰萩、是より帰休仰せ付けられ候事。

（二九八一）に郷土史家浦上豊氏によって書かれた『文部大臣高見三郎傳 小杉の巻』（文献⑭）で、その後、堀田節夫氏、蒙談会の主宰者で山口県にお住まいの金本利雄氏らが追跡調査した結果を発表した（文献⑮）。堀田氏（故人）は中央精機㈱社長で西郷頼母研究のため三〇〇冊もの蔵書を揃え、『栖雲記』などの頼母本も数冊発刊している。頼母は貞吉の伯父に当たるので貞吉研究にも熱心だった。関弥の孫飯沼一之氏と昵懇で、筆者も何度かお会いした。なお、蔵書はその後、白河市図書館に寄贈されている。

これらの文書は伝承を基にしているため、著者の誤解や創作が多く含まれているので注意を要するが、要点は次のようになる。

- ① 頼三は会津少年を長州に連れてきて、檜崎屋敷に住ませた。
- ② 会津少年が自刃さわぎを起こしたが、諫めてこれを止めた。
- ③ 当時、檜崎屋敷には高見フサが奉公していた。
- ④ 少年をサダサーと呼んでいた。
- ⑤ フサの孫高見三郎は会津少年の猛勉強振りを聞かされ奮起し、佐藤栄作内閣（第五代自民党総裁、後ノーベル平和賞受賞）の文部大臣になった。

（『陣中日記』より）

つまり、東京に凱旋し、行宮（^{あんぐう}皇居）に御滞在の天皇に拝謁し、お酒他褒美を受け取った。その後は山口を目指し、お城（鴻城）で毛利の殿様に拝謁し凱旋報告。万事終了し、一二月二日に萩に帰った。

では、第一陣にまぎれて東京に着いた貞吉はどうなったのか？

諸藩の重役に各藩の脱走兵の引き渡しを済めば、貞吉は取り残される。会津藩重役はいないから引き渡し先は無い。今さら、会津に戻すのは現実的ではない。

頼三は自分の責任で貞吉を長州に連れ帰ったのであろう。山口着は一二月一日。なお、「会津藩士貞吉が長州行きに同意するはずが無い」という見方があるが、捕虜貞吉の希望などは無視されて当然である。

一、貞吉長州滞在説の登場

堀田論文と檜崎屋敷跡説明板

西郷頼母研究会を主宰した堀田節夫氏が「貞吉が長州で養育された」という説を『蒙談第二四号』（文献⑯）に発表されたのは、平成九年（一九九七）である。なお、『蒙談』は長州の歴史研究会会報である。貞吉長州滞在説の元になった高見家の口伝の発端は、昭和五六年

その後、平成一八年（二〇〇六）十一月に山口県美祢市小杉の檜崎屋敷跡に美祢市教育委員会が「檜崎屋敷跡説明板」（図8）を設置した。その説明文の中に、「会津藩士飯沼貞吉がここで養育された」と明記された。檜崎屋敷は、長州藩士檜崎豊資の知行地であり、養子となった頼三が凱旋後、貞吉を連れてきて住ませた。なお、この屋敷はその後、高見家の所有となった（文献⑰）。

なお、知行地とは藩士が支配し、俸禄の代わりに知行地に住む農民から年貢を納めさせ収入源とする制度



図8 檜崎屋敷跡説明板



図13 榎崎建志さんとの面談

月頃から文通するようになった。彼は頼三がパリ留学中に入手した分厚いフランスの歴史書三冊を遺産相続すると共に、頼三の生涯年表を作成し、パリのモンパルナスに足を運び墓参し、墓の永久保存やメンテナンスを現地に依頼するなど熱心な頼三研究者だった。

美祢の説明板については懐疑的で、「榎崎家に断りもなく設置した」ことに不満を漏らしていた。筆者が本の出版準備中であることを告げると、彼とのメール通信が急増した。

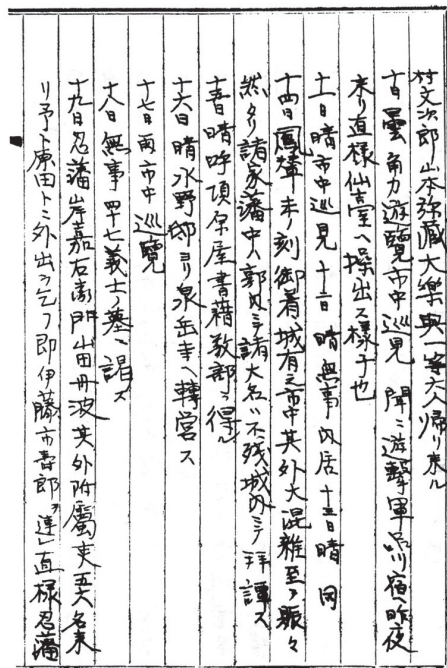


図14 榎崎頼三の『陣中日記』

昭和二十一年二月三日
榎崎頼三の陣中日記

彼は「本を書くならいい加減なことは言えない」として「戊辰戦争の責任者は誰か？」など、本質論に踏み込んできた。もはやメールでは対応できない。そこで、東京で直接面談することになった。その時の写真を図13に示す。

長時間の面談の後、彼から榎崎頼三の『陣中日記』(図14)一冊を受け取った。

この中に筆者の疑問を解く重要な鍵が含まれていた。

彼は「本を書くならいい加減なことは言えない」として「戊辰戦争の責任者は誰か？」など、本質論に踏み込んできた。もはやメールでは対応できない。そこで、東京で直接面談することになった。その時の写真を図13に示す。

この時、貞吉は「謹慎の身」であるから、静かに勉強に励んだことであろう。頼三と豊資は衣食住に加え、勉学のために参考書を与えたであろう。

年が、どうして立ち直ることができたのか？

②貞吉はどこで電信に出会ったのか？

の二点であるが、その手掛かりを貞雄は一切残さなかった。

四、飯沼家に伝わる話

貞吉長州滞滞在説が史実なら、飯沼家にも何か手掛かりが残っている可能性がある。

そこで、洗いざらい家探しをしてみたが、何も出てこない。貞雄(貞吉)は妻れん(連子)と共に晩年仙台に住んだが、昭和六年(一九三一)に没した。れんはその後、昭和二〇年(一九四五)まで生きたが、その世話を筆者の母弘子がした。弘子の長男飯沼一浩は平成三年(一九九二)から四年半かけて弘子の昔話を口述筆記し、『弘子思ひで草』(私家版)を残した。これには、「貞吉の空白の二年間について、世間は知っていた。しかし、何も言わなかった。れんも知らない」となっている。

榎崎屋敷での生活は貞雄にとって人生最大の恩義ではあるが、口が裂けても言えない極秘事項だったのだろう。

筆者の疑問は、

①自刃失敗で生きる目標を失った少

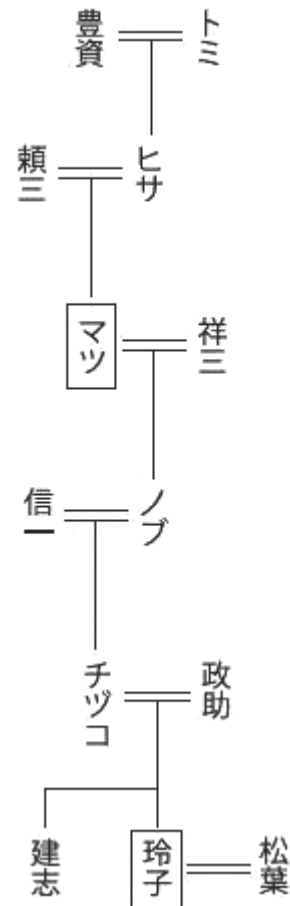


図12 榎崎家系図

美祢に榎崎屋敷跡説明板が平成一八年(二〇〇六)一月に設置された後、この話はメディアやインターネットにも登場するようになった。そんな中で筆者は政助の長男榎崎建志さんと平成二〇年(二〇〇八)五

五、榎崎建志さんとの出会い

図12に榎崎家系図を示す。頼三の一人娘マツの孫政助には二人の子があり、長女玲子さんは東京にお住まいで現在ご健在、長男建志さんは神奈川県逗子にお住まいだったが数年前、八二才で亡くなられた。



図16 榑崎頼三の墓
(パリ市モンパルナス)

た。

閏四月十六日、故郷より書簡来り、家内ならびに親族中の安否を聞く。なお、小児誕生の知らせがあった。直ぐに、各隊へ酒料として一両ずつ与え、本陣は大いに酒軍を張り、忍藩隊長等を招く。この戦に勝つことを祈願し、子供の誕生を祝うためである

(『陣中日記』より)

頼三が会津討伐に明け暮れていた時、初の娘マツが生まれたのである。マツは慶応四年(一八六八)三月一二日に生まれた。頼三が陣中日記に「私事」を記したのはこれが唯一である。酒宴を張って祝うとは、よほど嬉しかったに違いない。



図15 榑崎頼三と
晩年のマツの写真

ずがない。

なお、図16は頼三没後一四〇年の平成七年(一九九五)に建志さんが墓参した時の写真である。

六、長州藩士榑崎頼三

榑崎頼三とはどんな人物だったのか。経歴を略記しておこう。

なお、彼は二〇〇ページに及ぶ陣中日記を残しており、戊辰戦争に参戦した慶応四年二月から帰郷するま

での三〇〇日間、一日も欠かさず日記を記している。

弘化二年(一八四五)五月一五日 長州藩士林源八家に萩土原^{ひじわら}で生まれる。のち、榑崎豊資の養子となる。身分は馬廻り(大組、八組ともいわれる中級武士)。

慶応四年(一八六八)二月 戊辰戦争に出征。当時二二歳。

同年五月一日 白河口の戦いで西郷頼母率いる東軍を撃破して大勝。

同年八月二三日 戸の口原を突破し若松城郭門を破り本城攻撃。

同年九月二二日 会津藩開城に立ち会う。

明治元年(一八六八)一〇月二五日 東京に凱旋、若松城突入の功により羅紗軍服頂戴。

同年一二月一日 山口着、長州藩主毛利敬親卿に拝謁し、翌日帰萩。

同年一二月中旬 飯沼貞吉を美祢の榑崎屋敷に住ませ養育の機会を与える。

明治二年一二月一八日 横浜語学所に入學。

同年六月 戦功報奨金三〇両受領(一両は一円)。

明治三年一〇月二七日 横浜を出航して国費留學生としてパリに留學。

明治八年(一八七五)二月一七日 パリ五区の下宿

先で肺病のため死亡、享年二九歳。

同年四月 遺髪を東京芝の瑞聖寺^{ずいしょうじ}に埋葬。同年九月

戦功報奨金三〇両受領(一両は一円)。

頼三は有能で武勲多く、目を海外に向けて更に転進を考えていたに違いない。

しかも、榑崎頼三は、大村益次郎、木戸孝允、山縣有朋、桂太郎らと交流が深く、将来を嘱望された人物である。頼三との出会いは貞吉のその後の人生に大きなインパクトを与えたことに間違いない。

頼三の生地は前原一誠・奥平謙輔と同じ萩である。三人とも萩の名門明倫館に学んだ。明治元年時点での年齢は前原三五歳、奥平二八歳、頼三二三歳である。いずれも、長州藩中級武士の家で育ったので、伊藤博文や木戸孝允(後の参議)ら幕末革命の中核となった下級武士出身者とは一線を画していたと思われる。

頼三は大村益次郎とは四境戦争以来の仲である。頼三が陣中日記で「先生」としているのは、大村に対してだけで、木戸、山縣有朋(越後道総司令、後総理大臣)などは呼び捨てである。

また、同郷の総理大臣の自伝『桂太郎傳』の中に、榑崎頼三に言い及んだくだりがある。

なお、建志さんは頼三連行説に否定的な理由を「陣中日記に記載が無い」としたが、これは彼の誤解である。頼三は意図的に記載しなかったのであり、(秘事項を記載するは

帰国の途中、フランスの都パリを通った。志を同じくして横浜語学所に入校した檜崎頼三は、志を達してフランスに留学中であつた。……檜崎は不幸にして健康を損なつていた。……君は前途有望な人物であるから、學業は中断して私と共に帰国し、国のために事を成そうではないかと勧めたが、彼は聞かず、今しばらくパリに留まり、學事に励み、さらにベルリンに赴いてドイツの兵制をも研究した上で帰国したいとの希望を述べた。故に、私は遺憾ながら病める友を伴つて帰国することが叶わずパリを去つた。檜崎は私の親友である。……残念なことに彼は志半ばにして鬼籍に入ってしまったが、まことに惜しむべきことである（文獻^②より）。

七、樫崎家ご子孫松葉玲子さんの証言

筆者が松葉玲子さんにお会いしたのは平成二三年（二〇一一）九月一八日である。場所は京都。筆者が白虎隊の講演をすることを友達（萩高の後輩）から聞いて、東京から駆けつけたという。松葉玲子さんは檜崎マツのひ孫に当たる。

京都で講演後、彼女は「頼三が貞吉を連れ帰つたという話はマツから聞いていたので覚えている」と証言

<p>白虎隊・飯沼貞吉と養育の長州藩士</p>		<h1 style="writing-mode: vertical-rl; margin: 0;">子孫が笑顔で対面</h1> <p style="text-align: right; font-weight: bold;">京 都</p>
<p>戊辰(ぼしん)戦争(一) 集団自刃した会津藩の白 868〜69年)で敗れ、 虎隊で唯一生き残った飯 のひ孫が18日、京都市で 対面した。</p>	<p>飯沼貞吉の孫と、貞吉を養 育したとされる長州藩士 と、貞吉を会津から連れ 帰り育てたとされる長州 藩士樋崎頼三のひ孫、松 葉玲子さん(76) 〓 東京都 中野区 〓。</p>	<p>笑顔で握手をする飯沼一元 さん(左)と松葉玲子さん</p>

沼貞吉の孫と、貞吉を養育したとされる長州藩士のひ孫が18日、京都市で対面した。

対面したのは、貞吉の(68)孫の会社社長 二元さん(68) 東京都世田谷区 貞吉を会津から連れ帰りで育てたとされる長州藩士 樋崎頼三のひ孫 松葉玲子さん(76) 東京都中野区 。

二元さんが、京都守護職だった会津藩主松平容保の屋敷跡がある京都府庁で講演することを知り、松葉さんが駆け付けた。

対面に先立ち、二元さんは「自刃に失敗し、心

図17 松葉玲子さんと京都で握手
河北新報（平成23年9月19日）

に傷を負った貞吉は、榎崎家で養育されるなかで、回生のきつかけをつかんだのではないかと講演。松葉さんは「二元さんと笑顔を対面し、『長州と会津の友好をつくる一人になりたい』と話した。榎崎家の奉公人の口伝によると、頼三は1868年、山口県美祿市に帰郷した際、命を取り留めた貞吉を連れており、屋敷で養育したとされる。

えに加えて、檜崎家は弟健志が跡を継いでおり、「嫁に出た自分が言う立場になかった」としている。

今回、証言した理由については、「死ぬまで自分の胸にしまっておくのはどうか?」という自省と、「二

したのである（図17）。このハプニングに聴衆は拍手喝采、総立ちとなった。同席した吉井克也さんを含めて筆者らはその後別席で歓談した。その後、玲子さんから証言内容を詳しく記載した手紙が届いた。

①私は萩の家でマツ祖母と約六年間一緒に生活したので、貞吉の話はよく聞かされた。

②頼三は貞吉の母親に密書を出した。要旨は「お宅の息子さんは見所があるので、私が美祢で養育するので心配無用。この手紙のことは誰にも言ってはならぬ。例えば父親でも」。

③ マツは東京白金台の明治学院近くに建てられた檜崎宅に住んだことがあるが、タヌキやキツネがよく出た。

玲子さんは昭和一〇年（一九三五）三月一日に呉で生まれ、萩の明倫小学校を経て萩高校を卒業された。萩に住んだ理由について、父親（檜崎政助）が海軍中佐で長期の軍艦生活だったため一家は呉・逗子・横須賀を転々としたが戦時中に、子供たちを山口県萩市河添のマツが住む実家に帰郷させた。また、これまでこの話を一切しなかった理由は、「他言無用」の言い伝

飯沼一元様

飯沼一元様から(質問)

1) 可能なかぎり お返します。比較的読売新聞と京都新聞の
内容としては良かったと思います。基本的には新聞記事の通り
ですが、私はマツ祖母から庫が送られていたことは頼三は貞吉(敬称は略させて頂きたい)の母親に密書を出して「お宅の
息子さんは見所があるので、私が美祿で養育してまいります
心配しないで下さい。(しかし、この手紙のことは、ご主人に
申されるでない」と書いたらいい。(当時は家族のみならず)

2) マツ祖母から私は萩の家で一緒に生活してまいりましたが(父は当時
海軍中佐、大型戦艦に乗し、横須賀港に残り、萩に家族は帰郷)
私は昭和10年生れて、マツ祖母は昭和25年に亡くなっております。
6年近く一緒にして、口伝のやどる頼三手書のレターは見たいが

2011年10月6日

松葉 玲子

図18 松葉玲子さんから受け取った手紙の一部

歳下の弟は自分が聞かされた話を知らないかもしれない」と、そして、「マツから数えて四代に亘って繋いできた榊崎家長女の自負心」としている。

八、松葉玲子証言の物証探し

いよいよ、本稿の核心に入る。これまでの説明で「貞吉長州滞在説は本当らしい」と言えようが、なお、「物

女 考		女 貳		男 長		女 長	
出生 昭和元年九月四日	家子	出生 昭和元年九月四日	桂子	出生 昭和元年九月四日	建志	出生 昭和元年九月四日	子
父 橋崎政助 長男	ケツコ	父 橋崎政助 長男	ケツコ	父 橋崎政助 長男	ケツコ	父 橋崎政助 長男	ケツコ
専 事		女 考		主 戸		主 戸 前	
出生 昭和元年九月四日	ケツコ	出生 昭和元年九月四日	子	出生 昭和元年九月四日	橋崎政助	出生 昭和元年九月四日	橋崎マツ
父 田坂信一 長男	ケツコ	父 田坂信一 長男	子	父 橋崎マツ 長男	マツ	父 橋崎マツ 長男	マツ

図19 橋崎家の除籍謄本

証はあるか」に答えなければならぬ。

物証となりうる証拠は客観的にみて誰もが認めるものである。例えば戸籍謄本や登記簿謄本などは自治体が発行する公文書であり、物証になりうる。そこで、今回、証言①を証明するために橋崎家の除籍謄本を入手した。図19に橋崎マツの除籍謄本を示すが、萩市長の押印がある。なお、謄本には入籍や結婚などが記載されているが個人

情報なので省いた。

マツは明治元年（一八六八）三月二日山口県阿武郡（後萩市に更生）佐々並村百五番地で生まれ、明治二七年（一八九四）二月一五日に祥三と結婚、昭和一年（一九三六）一〇月一五日に孫のチツ子と政助が結婚したのを機に萩市河添五六番地に本籍を移籍、昭和二五年（一九五〇）二月四日（享年八二才）同地で死亡となっている。

玲子は昭和一〇年（一九三五）三月一日呉市濱田町で生まれ同年三月二五日に萩市のマツが住んでいる橋崎家に入籍、昭和三五年（一九六〇）に結婚し東京に転籍した。建志は昭和二年（一九三七）三月二日に逗子で生まれ、同年四月六日に入籍、昭和四五年（一九七〇）五月二五日に結婚し、逗子に転籍したとなっている。

従って、玲子さんがマツと萩市河添で同籍したのは戸籍上は昭和一〇年（一九三五）から昭和二五年（一九五〇）の一五年間となり、建志さんはこれより二少年ない一三年となる。もの心がついてマツおばあさんと話をし、これを記憶できるようになったのが九歳とすると、玲子さんは六年、建志さんは四年の対話機会があったことになる。

これは、玲子さんの証言①と一致するので公文書という「物証」を以て証明されたと結論できる。

また、建志さんが頼三養育説に否定的だった理由は女と男の違いと、六年と四年の違い、即ち遊び盛りの少年がおばあさんの膝元で昔話に耳を傾けるシーンより、おしゃまな少女がそうする方が遥かに自然な風景を思い浮かべることができよう。

証言③については、橋崎祥三（マツの夫）が残した『歴代小傳』（文献②②）に「明治二〇年に港区芝二本榎西に自宅を建てた」と記載されているので「物証」がある。

しかし、①と③が「物証」で実証されたからといって、これらは、明治二〇年（一八八七）以後の出来事であり、②の「密書事件」を証明するものではない。なお、除籍謄本は親族でないと取得できないので、筆者は玲子さんに代理人委任状を作成していただいて申請した。

第五章 残された疑問点の考察

貞吉の長州滞在説は以上迄の調査で一部は実証されたと言えるが、核心となる②は未解決である。また、

それ以外にも疑問点はいくつもあるので、本章では、事件の順を追ってこれらを検討する。

一、貞吉はなぜ脱走兵とされたのか？

この問題に関する資料は未だ見つかっていないので、筆者著の『貞吉本』（文献④）の一二九～一三二ページを基に筆者の解釈を以下に述べる。

貞吉は謹慎所で、新政府軍の役人の取り調べを受けたと思われる。調書のポイントは、①所属隊、②脱走兵の疑い、③首の包帯と考えられるので、以下これらについて当時の状況を述べる。

①白虎隊の再編

貞吉が所属した白虎隊は出陣時は士中二番隊で隊長は日向内記だった。しかし、二番隊士は戦闘や自刃で死者が続出し、八月二三日時点で半減した。そこで、会津藩は生存した二番隊士と一番隊士を統合し、更に幼年組を加えて改めて「白虎士中一番隊」を新設、隊長を日向内記とした。一方、望月辰太郎が率いる白虎隊寄合組は戦功著しく、九月一八日に「白虎士中二番隊」に昇格し、隊長は望月辰太郎となった（文献⑬六一〇ページ）

②脱走兵の疑い

このころ、猪苗代謹慎所からは脱走者が後を絶たなかった。山川健次郎、小川伝八郎、白虎隊長日向内記も脱走したし、『宇都宮本』（文献⑪）には五七名の脱走者が記載されているので脱走兵に間違えられる可能性は高い。

③首の包帯と不動堂

筆者は貞雄の取材を基に出版された『事蹟』（文献⑤）で貞吉を救出した武具役人印出新蔵の妻ハツ（当時四二歳）が「老婦」と表現され、「不動堂」が一切出てこないことに疑問を抱いている。貞雄はその後の河北新報記者の取材でもハツのことは「老婦」とか「婆さん」としている。ハツはあの日貞吉と同じ年頃の息子を探しに飯盛山に向かい、偶然一人だけ息のある貞吉を発見して介抱したのであるから、貞吉を自分の息子のように思っ接したに違いない。しかし、「戸外で女性と話をしてはなりません」という什の掟の中で育った貞吉である。当時、母ふみは三六歳。ハツとの関係を勘ぐられるのを避けるために、わざとうんと年が離れているようなニュアンスで語り、隠棲していた不動堂を病院にすり替えたのであろう。

「自刃した？」

男は怪訝そうに、貞吉の首の包帯に眼を向ける。

「それが何故、此処におるのじゃ？」

「偶然、助けられました」

「いい加減なことを言うな。自刃して介錯されるならともかく、助けられるなど有り得ぬわ。おぬしはそれでも武士か！」

貞吉がしばし黙っていると、

「おぬし、わざと急所を外したのであろう！」

そう決めつけて、男は勝手に納得したようだった。そして、話を進める。

「まあ、よい。して、誰に助けられたのじゃ？」

貞吉はハツのこと、塩川の近江屋に行き、そこで医者の治療を受けたことなどを話した。

彼の興味は、貞吉とハツのことにあるらしく、下卑た目つきで更にしつこく訊いてきた。

「そこで女と一緒に泊まったのだな？　いつまで居たのだ？」

「昨日、塩川を発って此処へ来ました」

「昨日だと？　近江屋は既にひと月以上前から我ら米沢藩の本陣じゃ。出鱈目を言うても無駄だぞ。正直に言え」

以上を背景に取り調べの状況と結果の推定を示そう。

約二五〇人の白虎隊士が猪苗代謹慎所に収容された九月二四日に遅れること二週間余り。首に包帯した怪しげなやつが「所属は白虎士中二番隊、隊長は日向内記」と申告してきた。新政府軍の在陣役人にしてみれば、会津藩から提出された軍隊組織台帳に該当隊がない。「貞吉の申告」は貞吉を要注意ブラックリストに載せる十分な理由があったと思われる。

このとき貞吉の調書を取ったのは米沢藩であるが、貞吉の自刃失敗と一ヵ月にわたる逃避行を聞いて、素直に納得したとは思えない。調書作成場面を再現してみよう。

「おい、飯沼。色々聞きたいことがあるでな。そこに座れ」男は貞吉をじろりと見やると、椅子を指差し、居丈高な調子で言った。

「おぬし、二番隊の隊長は日向内記だと言っていたな？」

「はい」

「台帳には望月となっているぞ。して、このひと月おぬしは何処で何をしていたのだ？」

「仲間と共に敗走し、飯盛山で自刃しました」

男の興味が別の方向にあることを知り、貞吉はうんざりしてきたが、相手は謹慎所の役人である。ここは順序を追って話す必要があった。塩川から、喜多方を経て不動堂に移り住んだことなどを正直に話した。

「すると、おぬしは密室に女とひと月以上も一緒にいたのじゃな」

男は咳払いをして、威厳を見せつけるように言った。

「よいか。戦線を離脱して逃げ隠れる奴を脱走兵というのだ。司令官には、そう報告しておく。もう下がってよい」

二、長州藩への引き渡し

(一) 岡八十吉との出会い

その日の午後、貞吉は再び役人の呼び出しを受けた。ここで、岡八十吉が登場する。

「俺は長州藩士、岡八十吉と申す。今般、軍務局からの命令で、大垣藩と共に脱走兵を東京まで護送する役目を遣わされた。司令官は檜崎頼三中隊長だが、俺が代役を任されている。おぬしはわけあって脱走兵扱いとなったが、所属隊が無いので俺が直接管理することにした」

明治元年一〇月二四日、護送の一行は草加（埼玉県

草加市」に到着した。

頼三が本隊を迎えに来た。岡が真つ先に頼三の許に駆け寄り、これまでの報告をした。

「中隊長殿、只今戻りました。途中、何事もなく捕虜全員をもれなく護送いたしました」

「そうか、ご苦労であった。今宵、本隊は千住に宿すことにした。速やかに元の所属藩に引渡し、その後は各藩の指示に従わせよ」

岡は護送してきた脱走兵の隊長を集め、頼三の指示を伝えると、貞吉に向き直る。

「護送人一行は、此処で元所属の各藩に引き渡されることになった。貞吉、おぬしは引き取り手がないので、しばらくは我が本隊のところに留まるがよい。折を見て、中隊長の指示を聞くことにする。よいな」

(二) 檜崎頼三との出会い

「護送人の中に、会津兵が一名混入しております。猪苗代で在陣役人が脱走兵と誤認し、此度の護送人に加えてしまったようです」

「何？ 会津兵が混じっていったと」

「はい。現地で本人の身元を確かめたところ、会津兵と判明しましたが、まだ一六歳の少年で、咽喉に傷を

負っており、どうやら飯盛山で集団自刃し、奇跡的に一命をとりとめ、村を転々とした後、猪苗代の謹慎所に出頭したようです」

「会津兵と分かっていながら、何故連れて来たのか？」

「はい、申し訳ございません。猪苗代では四六〇余人もの護送人の確認と取りまとめに忙殺されておりまして。しかも、少年の身元が判明したのは出発直前のことで、現地で用意された護送人名簿にも既に氏名が記載されていたので、私の責任で一行に加えて連行しました」

「…それで、そやつは今、何処にいる？」

「この本営にて預かっております」

「此処にいるというのか？ すぐに連れて参れ」

自室にとつて返した岡は、急ぎ貞吉に告げた。

「貞吉、中隊長が君に会いたいそうだ。経緯は俺から伝えてある。中隊長は話の分かるお方だから、何でも包み隠さずに話すがい。とにかく、おぬしの運命は中隊長の手の内にあるということを忘れるなよ」

岡の最後の言葉に、貞吉は腹立たしさを感じた。

（そんなことは言われなくても分かっている。俺は命が惜しいわけではない。死に場所を探しているのだ）

貞吉は黙って岡に従った。「入れ」との声が聞こえ、

岡と貞吉は部屋の中に入った。

「お前が会津兵か。して、貞吉とやら。その首の包帯はどうしたのじゃ。集団自刃したとか聞いたが……」

一番聞かれたくないことを聞かれ、貞吉はむっとした。

「仰せの通りですが、それがどうしましたか？ 貴方さまには関係のないことです！」

「確かに俺には関係ないことだが……」 貞吉の心情を察して、頼三は質問を変えることにした。

「俺は、脱走兵全員を一人残らず各藩に引き渡したとお上に報告したばかりだ。ところが、まだ引き渡していない者が此処にいる。これでは、虚偽の報告をしたことになる。従って、お前をどうするか、決めねばならぬ」

「では、殺してください」 咄嗟に、貞吉は言った。

「私がいなくなれば、問題は解決します。さあ、この場で手打ちにしてください。さもなくば、自害させてください。刀を貸してください！」

貞吉は、これで苦悩から解放されると思った。

「許さぬ！」 頼三の鋭い声が飛んだ。

「親から授かった命、軽々しく扱うことは罷りならぬ」そして椅子から立ち上がり、岡に向き直る。

「俺は貞吉を長州に連れ帰って、この者の性根を叩きなおすことに決めた」

岡は驚いて、頼三を見た。

「長州へ、ですか？」

「そうだ。八十吉、おぬしの家は俺と同じ（萩郊外の）佐々並だったな。俺はこれからも色々とお役目があり、本隊に同行できぬ。その間、おぬしが貞吉を預かり、連れて参れ。服装も我が藩と同じに偽装し決してバレぬようにな。会津弁もならぬ。何かあれば、一切の責任は俺が持つ」

「承知しました」

こうして、貞吉は望むと望まざるとに拘らず、岡の監視の許で長州に同行することになった。

なお、萩にお住いの楯取素彦顕彰会会長の中原正男氏は、その著書『白河踊』（文献②⑧）に佐々並に岡家は一軒しかなく、所有者は代わったが現存する家があると記している。楯取素彦は吉田松陰の娘と結婚し、後正二位勲一等男爵叙勲。

三、貞吉は何時頃どうやって美祢の檜崎屋敷に辿り着つたのか？

この疑問についても『貞吉本』（文献④）の一七八

一九二ページに筆者の解釈を示したので参考にしていただきたい。要点は以下ようになる。

明治元年（一八六八）二月一日昼頃、頼三隊は山口の鴻城に着きお屋敷に参上し殿様に拝謁。お酒など頂戴し一泊した（文献^⑭）。翌日、馬を調達し頼三と部下の岡は、貞吉を連れて佐々並に向かった。義父豊資の佐々並屋敷には、三月に生まれた娘マツが待っている。佐々並は萩と山口の間にある宿場町で、山口から二四km。一刻も早く娘に会いたい。急いだので佐々並には昼頃までに着くことができた。屋敷近くまで来たところで、頼三は岡に数日の間、貞吉を預かって欲しいと依頼した。マツがいる家に貞吉を匿うことは危険と判断。岡は承諾した。

なお、中原氏によれば岡と檜崎家の距離は佐々並川を挟んで約六〇〇mという。

豊資の屋敷に着くと、家族一同の大歓迎を受けた。出陣して一〇ヵ月、娘は九ヵ月となり可愛い。頼三隊の活躍ぶりは既に伝わっていたため、話は尽きなかった。

一段落し豊資と二人だけになったところで、頼三は、貞吉の話を持ち出し、美祢小杉の檜崎屋敷に謹慎させるべく豊資に相談。豊資はしばし考え込んだ上で、快

お、筆者は文献^②では美祢としたが間違っていた。

この時、マツは生後九ヵ月。頼三はフランス留学の準備に多忙だった。横浜語学所に入学したのは明治二年一二月であるから、頼三が離萩した時マツは未だ一歳九ヵ月である。マツは幼児期の一年弱父頼三と一緒に過ごす機会があったが、頼三が貞吉のことを話したとは考えられない。マツには父の記憶すらなかったであろう。

一方、玲子さんの手紙には「頼三はパリから義父豊資宛に手紙を送った」とあり、しかも、「手紙封筒の宛名面が手元にある」と書かれている。そこで、萩博物館の道迫真吾学芸員に問合せて、彼の研究報告書（文献^{②③}）を入手した。手紙の内容は、頼三がパリに向けて留学生二人と共にフランス艦に乗り込み横浜出港後、帆船と接触事故を起こして沈没しそうになったこと。普仏戦争の速報、実弟が自費でパリ留学を計画しているので金策をよろしく等となっており貞吉に関しての記載はない。筆者は本当に貞吉が無いかを彼に電話で問い合わせたがやはり無いとの回答だった。

やや細部の話になるが、頼三は政府派遣留学生であるから、現地からの報告を定期的に「ニュースレター」形式で当局に送っていた。普仏戦争の速報などは大い

諾した。

翌日から頼三は藩公に提出する『戦録略』（『陣中日記』の要約版）の執筆に取り掛かること一二日（『陣中日記』）。明治元年二月中旬、頼三は岡から貞吉を引き取り、馬で貞吉を前に乗せ小杉の檜崎屋敷へ向かった。佐々並から小杉までは三二km。小雪がちらつく寒い日で、二人が檜崎屋敷に着いたのは昼頃。屋敷の近くまで来ると、頼三は貞吉を馬から降ろし、轡を引かせた。周辺の家々から人々が集まってくる。準備のため数日前から来ていた豊資と妻トミが出迎え、凱旋の宴となり、切腹騒ぎとなる。

この過程で重要なのは、頼三の一存での会津藩士の連行は規則違反なので、これが露見しないように隠蔽・偽装することである。もし発覚すれば、事情はともあれ、違反は違反であり、頼三の責任は免れない。玲子証言^②の密書の「他言無用」は頼三の絶対条件である。頼三にとっては人里離れた美祢の檜崎屋敷は絶好の隠れ家だったのである。

四、マツは誰から貞吉の話を聞いたのか？

頼三が帰萩したのは萩の佐々並にある義父豊資の実家であることが今回の除籍謄本調査で判明した。（な

に役に立つ情報だったに違いない。一方、豊資宛の手紙は祥三が萩市に寄贈したと建志さんから聞いた覚えがある。つまり、道迫氏が入手した資料には公的なものと私的なものが混在していた。豊資宛の手紙は私的なものであるから、その内容は「マツは元氣かに始まり、最後に金策依頼を付記したのである。貞吉の記載が無いのは「露見を回避」するためで当然である。

では、マツは誰から貞吉の話を聞いたのか？

ここでの「鍵」は「他言無用」と「密書」である。「他言無用」は頼三にとって最重要事項なのでここでその理由をあらためて整理しておく。

会津から帰萩するまでの頼三の任務は諸藩の脱走兵四六〇余人を出身藩に引き渡すことである。頼三はこれを完遂し、「一人残らず各藩に引き渡した」とお上に報告した。だが、貞吉を連行したことで会津兵が一人残ってしまった。つまりこの報告は虚偽となっていた。報告は東京で天皇に、山口で藩主に、しかも山口では戦略録という書面提出である（第四章冒頭参照）。貞吉連行が発覚すれば頼三の首が飛ぶ。貞吉事件は^⑥にしなければならない。貞吉も^⑥がバレれば頼三に多大な迷惑が掛かることは十分承知していたであ

ろう。貞吉（貞雄）が「他言無用」をかたくなに守り続けた理由はここにある。

密書を出したことを知っているのは頼三と貞吉の二人だけである。理由は密書の宛先（母ふみ）は貞吉に聞く以外選択肢がない。⑥に係わる情報を他人を使って調査するなどあり得ない。なお、豊資も密書のこととは知っていたかもしれないが「他言無用」のことを家族に伝えるなどは頼三に対する裏切り行為であり、貞雄と同様に誰にも言わなかったに違いない。

一方、マツが玲子さんに伝えたのは密書事件七〇年後の昔話であり当時の状況とは全く異なる。

以下、玲子証言について順を追って説明する。

マツが生まれたのは佐々並の檜崎豊資宅である。マツを育てたのは、祖父豊資とその妻トミおよび母ヒサであろう。従って、マツの人生には豊資が重要な役割を担っているはずである。

豊資の経歴を『歴代小傳』（文献②②）や除籍謄本等を元に調べたので紹介しておこう。

文政九年（一八二六）一月二三日生まれ。檜崎家は代々女系で、豊資は萩藩大組士（禄高九三石八斗）の養子となり第二五代を継いだ。嘉永二年（一八四九）二三歳の時に妻トミとの間に一人娘ヒサが生まれてい

る。給領地（知行地ともいう）は美祢小杉。この地には一二軒の農家があり、庄屋は高見総本家であったが、豊資はここに仮屋敷（通称檜崎屋敷）を構えた。小杉集落は萩と下関の中間、ひっそりとした山間にある。明治二年（一八六九）には毛利家臣給地召上げの沙汰が出て、檜崎屋敷は高見家の所有となった。

豊資は明治元年（一八六八）二月三日に毛利家の千枝姫様のお紐離お祝い式に、翌年三月には興丸君（毛利元徳公の嫡男元昭公の幼名）の鎧初召に参式しているが、佐々並から山口の鴻城に出動したはずである。

豊資一家は廃藩置県後の明治五年（一八七二）に東京品川の毛利藩邸に移住したが、この時マツも一緒だった。豊資はその後、明治八年（一八七五）四月に頼三の遺髪を港区芝白金台にある瑞聖寺に埋葬した。明治九年（一八七六）二月に深川の毛利家別邸番に着任、同年九月に白金村に土地を購入した。

明治一〇年（一八七七）に毛利元徳公が頭取を務める一五国立銀行が東京銀座に設立されたので、豊資にも関連する仕事が続いてきたと思われる。なお、毛利元徳公は毛利敬親公の養子で両者は子弟関係にあった。

明治二〇年（一八八七）に東京港区芝二本榎西町に

自邸を新築してトミ、ヒサ、マツと一緒に生活した。松葉玲子さんが、マツおばあちゃんから「白金屋敷にはタヌキやキツネがよく出た」と聞かされたのはこの時（玲子さんが生まれる四八年前）の話である。

豊資が死亡したのはその僅か五年後の明治二五年（一八九二）で享年六七歳。

以上で、玲子証言①と③が物証を以て実証された。高見家伝承については、フサと一緒に生活していたのであるから、強い印象が残り、代々語り継がれてきたので「物証」が無くても十分な「動機」がある。一方、②の「密書を出し他言無用」については①と③が実証されたので排他論的には立証されたことになる。そうでなければ、②はマツが嘘を付け加えたことになるが、嘘追加の理由は考えられない。

しかし、筆者は本件の真相についてはさらなる検証が必要と考える。

ここは本稿の核心事項なので、改めて「高見家伝承」と「玲子証言」の骨子を整理しておこう。

高見家伝承は、A貞吉を檜崎屋敷で養育した、B貞吉は自刃騒ぎを起こした、の二点である。一方、玲子証言は、C頼三は貞吉の母親宛に密書を出した、D密

書のことは誰にも言ってはならない（たとえ父親にも）、E密書の内容はお宅の息子さんは見所があるので当方で預かっているので心配無用、の三点である。

問題は「頼三は何故密書を出したか」と「貞雄はいつ、どのような状況と動機でマツに話したか」である。

では頼三が密書を出した理由は何か？答えはDとEから推察できる。

貞吉を檜崎屋敷に連行し勉学の機会を与えた時、頼三は「会津にいる貞吉の母は行方不明になった貞吉の安否を心配しているだろうから、当方で預かっていることを何とかして知らせたい」と思った。日々、愛らしくなるマツを抱くたびに、やがてパリに留学して家族が離れ離れになり、安否が確認できなくなったら親子の絆は守れない。一方、もし本件が露見すれば、政府派遣のパリ留学候補生から自分が外されるのは必定である。

そのためには「密書」にしなければならない。密書とは手紙とは全く異なり、軍事機密並みの取り扱いが必要になる。しかも、美祢から会津までは約一二〇〇kmと遠い。貞吉を萩に連行した時、頼三隊が猪苗代を出発したのは一〇月一二日、萩着は十二月一日であるから、徒歩で五〇日かかった。頼三は会津討伐で軍事

機密情報を取り扱ってきた知見を活かしてこの実行を
決断した。

密書を出すためには母親ふみの住所が必要であり、
頼三は貞吉にこれを聞いた。貞吉は敗戦後の若松の混
乱状況を知らないので飯沼本家の住所会津若松市西栄
町一番地を告げた。

余談になるが密書の会津着を明治二年二月（三月頃
と仮定すると、本宅は既に消失、父時衛は護国寺謹慎
中で母ふみ一家は塩川謹慎所であるから密書は不達
だったと考えられる。なお、本論では密書がどうなっ
たかは問題ではなく、頼三が密書を出した動機が明確
になればよいので、これを余談とした。

五、貞雄はマツにいつ、どこで会ったのか？

前節で頼三が密書を発送した理由を説明した。勿論、
これは筆者の推論であるが頼三がおかれた状況を踏ま
えた上での筋書なので反論を許さない自信がある。

では、貞雄が密書事件C、D、Eをマツに伝えた時
期と動機はどうだったのだろう。

筆者の仮説は、「貞吉はマツと直接二回会った」で
ある。

では、いつ、どこで、二人は会ったのか？

これを読み解くために、貞吉（貞雄）と檜崎家の対
比年表を作成したので図20に示す。

以下、順を追って仮説を説明、検証する。

(一) 貞雄とマツの一回目の出会い

その一つは、頼三の遺髪埋葬式である。頼三は明治
八年（一八七五）二月一七日にパリで死亡し、遺体は
モンパルナス墓地に埋葬された（享年二九歳）。豊資
は頼三の突然の訃報に言葉を失ったに違いない。

我が国の電信は明治六年（一八七三）に東京・長崎
間が開通したので、パリからの国際電報は長崎経由で
東京に転送される。訃報は豊資宛に「ナラサキライゾ
ウパリデシボウス」などの電報で届いた。東京住まい
の豊資は貞吉が通信省（当時は工部省）に入省したこ
とは風の便りで知っていたであろう。豊資は早速、貞
雄（明治四年以降は改名して貞雄）に打電したのであ
う。当時、パリから東京まで遺髪を届けるには船便で
二カ月近くかかる。

檜崎祥三が残した『歴代小傳』（文献²²）にはわざ
わざ「四月に入って遺髪を東京芝瑞聖寺に埋葬した」
と書かれている。これは、遺髪の到着を確認した上で、
埋葬式の日時を決めたことを意味する。

貞雄居住地	貞雄身分	貞雄イベント1	貞雄イベント2	檜崎家の状況	檜崎マツの状況(年齢)他
会津若松	白虎士中 二番隊	飯盛山にて自刃	その後、印出新蔵の妻ハツにより救 出される。	檜崎頼三長州三番中隊長として 会津攻撃	3/12誕生
会津若松	白虎士中 二番隊	会津藩降伏	塩川で傷を癒す。 その後、猪苗代謹慎所に出頭	檜崎頼三会津開城式に参列	佐々並豊資宅で生活
会津若松 ⇒東京 ⇒山口	捕虜 脱走兵	降人(捕虜)護送	頼三に連行される	長州藩が脱走兵460余人を東京に護送 その後、貞吉を長州に連行	同上
美祢小杉	謹慎者	檜崎屋敷で謹慎生活	高見フサが世話する。	12月檜崎頼三山口着(貞吉同行) 佐々並豊資宅に帰萩(貞吉同行) 美祢檜崎屋敷に凱旋(貞吉同行)	同上
静岡	学生	旧会津藩斗南藩へ移封 貞雄に改名	帰京後、静岡の林三郎塾で勉強。	檜崎頼三横浜出港しパリに留学	同上
東京 下関	工部省 電信寮	貞雄美祢の高見家を 訪問	電信寮技術等外見習下給申付 10/5赤間関在勤申付候事	檜崎一家東京品川に転居	東京品川長州藩 下屋敷で生活
山口 東京	山口局 日本橋局	山口→東京→神戸 に転勤	3/9帰京申付候事 4/10日本橋局詰申付候事	2/17檜崎頼三パリで病死(29才) 豊資遺髪を東京芝瑞聖寺に埋葬	父檜崎頼三の 遺髪埋葬に参列 貞雄と初めて対面(8歳)
新潟	新潟局		新潟電信建築主事	檜崎一家東京白金台に移住	東京白金台二本榎で生活
広島	広島局	生年訂正申請(6/18) 送別会で白虎隊自刃の 真相を語る(11月末)	広島電信建築長	檜崎豊資4月18日死亡(67才)	同上
東京	東京局	中村謙の白虎隊事績 取材に応じる(8月)	東京郵便局在勤	マツ檜崎家家督相続(12/18)	同上 貞雄と2度目の再会(25歳)
東京→広島 朝鮮国	大本営付	日清戦争に出征(6/27)	東京郵便局在勤 朝鮮国第一電線架設隊付き	マツ祥三と結婚(2/17)	祥三と結婚後昭和10年に萩市河 添に転居

図20 飯沼貞雄と檜崎家の対比年表

明治七年	九月廿四日	電信寮技術等外上給申付候事	工部省
明治八年	三月九日	補電信寮技術等見習下給	工部省
明治八年	三月十日	日本橋局詰申付候事	電信寮
明治八年	四月十日	神戶局出張申付候事	全
明治八年	五月廿五日	神戸局在勤申付候事	全
明治八年	七月廿三日	神戸局在勤申付候事	全
明治九年	三月廿六日	補電信寮技術等見習中給	工部省
明治九年	三月廿六日	補電信寮技術等見習中給	工部省
大正二年	月日	從電報部等飯沼貞雄	飯沼貞雄
通信大臣	元田肇殿		

図21 飯沼貞雄の官歴書の一部

一方、貞雄は当時二一歳、山口勤務であったが、官
歴書の三月九日に帰京申付け候事、同四月一〇日に日
本橋局詰申付候事と記されている。図21に貞雄の官歴
書の明治八年部分と末尾を示す。この官歴書の提出先
は通信大臣元田肇で、恩給請求のための重要文書で
末尾に「右の通り相違無之候也」と記載されているの
で正式な業務命令である。

豊資から頼三の急死の連絡を受けた貞雄は何が何で
も上京し遺髪の埋葬式に参列したかった。頼三との出

会いは何事にも代えられない宝、今自分があるのは頼三のおかげなのだ。

当時の貞雄は入省して二年六ヵ月、身分は電信寮技術等外見習下級と低いが、月給は入省した明治五年は一二月、翌年一三円、この年一五円と順調に増えていた。鉄道は新橋―横浜間と大阪―神戸間が開通したただけの時代、山口から東京に移動するには一旦下関に出て、船（蒸気船）で東京に向かうと約二―三週間かかる。

東京行きが大変ならば、戻りも大変であるがこの年は特に行き来が激しい。五月二五日に神戸局へ出張命令、七月二三日付けで神戸局在勤辞令が出ている。面白いことに、七月三〇日に八円五〇銭、翌年二月二日に五円二五銭の超過勤務手当が出ている。合計で一三円七五銭、ほぼ一ヵ月分の給料に近い超勤手当を得ている、これは何を意味しているのか？ 貞雄は「急逝した命の恩人の葬儀」を理由に上司に懇願して上京の機会を作ってもらった。その見返りとして貞雄は猛然と働いたのではないだろうか。

豊資は瑞聖寺で執り行われた遺髪 の埋葬式でマツに貞吉（貞雄）を紹介し、頼三が「貞吉を美祢で養育したことがあった」ことをマツに説明した。貞雄は「私が今あるのはお父さんのおかげです」と感謝の念を述べ

を付記している。

この書は我が子頼三が陣中にて筆記せるものなり、非凡であつたがゆえに、早く身まかつてしまつた事が何とも惜しく、折にふれこの書を見るにつけても、過ぎし日の事などを思い出し、老の涙の種となるのは儚き事である。明治二年一〇月 豊資

（『陣中日記』より）

豊資は非凡であつた頼三の一人娘マツに自分の責任で良縁を実現してあげたいと考えていたことである。

榑崎家は代々女系なので養子で家系を繋いできた。当時の家督相続権は男子と決められており女子は特別 な理由が無ければ戸主にはなれない。榑崎家の除籍謄本および祥三が残した『歴代小傳』（文献²²）によれば、豊資も養子であるが榑崎家第二五代の戸主（家督相続者）となつたのは天保十一年（一八四〇）、一五歳、居住地は萩である。第二六代は林家からの養子頼三で、明治八年に病死したため、家督は継がなかったが、住まいは萩、第七代は祥三で明治二七年（一八九四）一月一五日に四二才で萩の中村家から養子入りしマツと結婚、家督を継いだ。

図22に示すように祥三は「明治二四年（一八九一）

べ、頼三の突然の不幸のお悔やみを述べた。当時マツは八歳、貞雄は二一歳。マツは幼児期の僅かな時間を父と過ごただけで遺児となつてしまった。父の武勲については聞かされていただろうが、貞雄との初めての出会いで、自分の知らない父の一面を聞いた。なお、貞雄は背が高くイケメンだったことを付記しておく。

（二）貞雄とマツの二回目の出会い

玲子証言C、D、Eは高見家伝承にはないあまりにもリアル且つ詳細情報であり、マツが八歳の一度目の出会いだけでは説明しきれない。筆者はマツが成人してから二度目の出会いがあったと考える。では、それはいつ、どこで、どのような背景があつたのか？

マツと貞雄の居住地を比較すると図20に示すように二人の出会いは、東京在住の時に限られる。以下、時間軸と場所を中心に順を追って仮説と検証を進める。

豊資は明治二〇年（一八八七）に港区芝二本榎西町に自邸を建てた。この時マツは一九歳で未婚である。豊資はマツが生まれた時から父親代わりとしてマツを育てた。筆者は豊資が白金台に家を新築したのは、マツに花婿を迎え新居生活に備えたためと考える。

豊資は明治二二年に『陣中日記』の巻末に以下の文

二月公爵毛利家へ奉職、毛利愛子様お付申付けらる」と記している。愛子様は毛利元徳公の娘でお屋敷は東京品川高輪の洋館で白金台の近くにある。豊資は萩在住の時から毛利家に奉職し、殿様の上京に従つて上京して白金台に家を建てた。祥三はこの時毛利家に奉職した。毛利家仕えで二人は同職となつた。豊資は早速祥三を自邸に招いたことだろう。除籍謄本によれば祥三の生地は萩で豊資とは同郷である。萩から遠路上京してきた祥三を迎えて二人は意気投合した。昔話に花が咲き、話題は頼三のことになった。祥三は頼三の輝

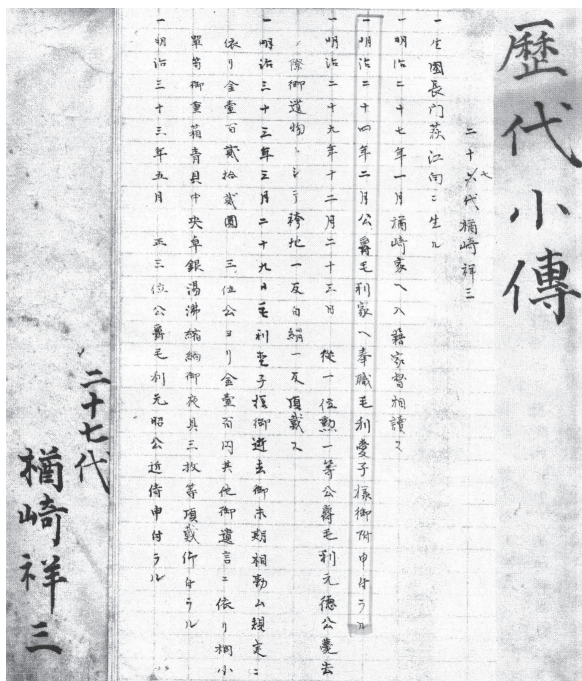


図22 『歴代小傳』の二七代榑崎祥三記載の頁

かしい武勲は百も承知である。豊資はマツが頼三の一人娘であることを誇らしげに祥三に紹介したに違いない。豊資はこの時、将来「祥三とマツが結婚して欲しい」旨を祥三にも家族にも伝えたであろう。その二年半後の明治二六年（一八九三）二月一日、マツが檜崎家を相続し戸主となった。祥三との結婚はその二ヵ月後の明治二七年（一八九四）二月一日、マツ二五才、祥三四〇才である。

一方、貞雄は明治二五年（一八九二）四月の時点では広島電信建築署長代理だったが、同一一月三日付けで、東京転勤の辞令が出ている。広島戸枝某宅で開催された貞雄の送別会に白虎隊士原新太郎が同席し、飯盛山自刃の真相を開示したのはこの時である。なお、一〇年後にこの情報が『白虎隊顛末記』の手記になる。詳しくは『貞吉本』（文献④）参照。

そして明治二五年二月三日付けで東京電信建築署第一部主任に着任、東京在勤となり、一年半後の明治二七年（一八九四）六月二六日に日清戦争出征のため広島の本営付となる。貞雄は同日付けで弟関弥宛に事実上の遺言状を送っている（文献①）。さらに、「朝鮮に上陸し釜山電信局で護身用のピストルを渡された

（二八九四）二月前と考える。貞雄の明治二五年頃の業務は日清戦争用に六年がかりで準備してきた会津本郷焼軍用碍子五万個の調達最終段階にあり（文献①）超多忙、一方の檜崎家は豊資の死後一年半の間は不幸が重なっていたが祥三との結婚は決まっていた。この時、貞雄は三九歳、マツは二五歳だった。

日清戦争に使用する秘密兵器・会津碍子の調達の先頭を走っていた貞雄は、機密情報の伝達が如何に重要で大変なことを熟知していた。

貞雄は「当方で預かっているから心配無用」という趣旨の密書を出した頼三の気配りをよく覚えていて、その感謝の気持ちをマツにどうしても伝えたかったのである。

二人が再会した時どんな会話があったのだろうか？一八年前にお父様の遺髪埋葬式でお会いしましたが覚えていらっしゃいますか？このたびはおじい様も亡くなられてさぞお寂しくなれたことでしょう。心からお悔やみ申し上げます。貞雄は頼三との出会いの詳細と、その後の自分の辿った道を丁寧に説明したことであろう。特に莫大な費用とリスクを賭してまで会津に密書を出していただいた頼三の気配りと勇氣につ

時、『私は白虎隊で死んでいるはずの人間です。命は捨てています』と言って是を断った」と記されている（文献①）。

筆者は貞雄がこの時期（明治二五年～出征迄）に戦死に備えて身辺整理したと考える。

まず、明治二五年六月一日付けで生年訂正の登記申請をした。即ち、白虎隊に入隊するために誕生日を一年ごまかしたのを正した。次に明治二六年（一八九三）八月には東京で『事蹟』の著者中村謙の取材に応じた。

当時の新聞の死亡記事は、現在と同一ような黒枠形式で死亡広告を扱っていた。貞雄は豊資の死亡記事から瑞聖寺を訪ね墓前に焼香し、豊資の住所を確認したであろう。

豊資と頼三が天に召された今、頼三との出会いを知るのは自分だけになってしまった。

マツは一八年前に頼三の霊前で会ったことを覚えているだろうか？あの時、マツは八歳だった。やがて戦争に出征すれば、自分の命はどうなるか分からない。「密書の秘密」は永遠に迷宮入りになる。

筆者は二人が再会したのはマツが戸主となった明治二六年（一八九三）二月末から祥三と結婚する翌年

いて繰り返し感謝の意を伝えたに違いない。貞雄はこの時、この話を秘扱いにすることを頼三と確約したことを付け加えるのを忘れなかった。

玲子さんの証言C「頼三は貞吉の母親宛に密書を出した」は貞雄がマツに話したのである。ここで、高見家伝承「B貞吉は自刃騒ぎを起こした」は玲子証言には無いのは何故か？答えは貞雄がマツに話さなかったからである。この時貞雄は過去の自刃騒ぎを超越した重大任務を遂行中であり、マツに話す意味が無いのだ。このことも、貞雄がマツと直接会って話したという筆者の仮説の傍証になる。

なお、祥三は明治三三年（一九〇〇）に毛利元昭公のお付き役を申し付けられるなどで、檜崎一家はその後長く白金台に住んだ。祥三とマツの間に長女ノブが明治二七年（一八九四）二月一七日に生まれた。「密書のことは誰にも話すでない」の掟は厳守しなければならない。マツは祥三には何も話さなかったであろう。その後、ノブの長女チズ子と萩の福多家から養子に入った政助の間に昭和一〇年（一九三五）二月一日に生まれたのが長女玲子さんである。この時マツは六七才。

二回目の出会いから四〇年後にひ孫玲子さんが生ま

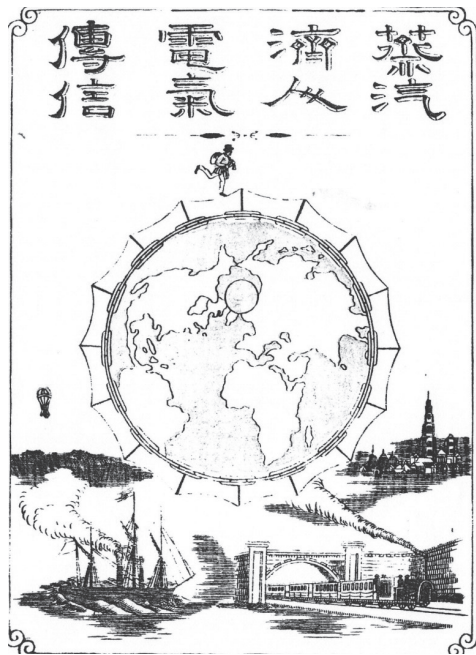


図23 西洋事情の表紙

れ、政助の生家萩市河添五六番地で同居生活が始まった。

マツは玲子さんに貞吉談を話したくて、うずうずしていたことだろう。しかし、玲子さんがマツおばあちゃんから貞吉談を聞いたのは、昭和二十三年（一九四八）頃である。明治元年の事件発生から約八〇年、マツ八〇才、玲子さん一三才である。マツが亡くなったのは二年後の昭和二十五年（一九五〇）二月四日である。「他言無用」を守り続けてきたが誰かに伝えなければならぬ。かわい子孫娘に何度となく語り伝えた光景が浮かんでくる。

玲子さんは上記に加えて、「密書のことは父親（時衛）にも言つてはならぬ」と証言している。頼三は白河口の戦闘相手が貞吉の父時衛であることを知っていたのかもしれない。いずれにしてもこれで、玲子さんの三つの証言は全て解明されたのである。なお、以上の経緯は長州藩主毛利元徳公家臣橋崎頼三と会津藩主松平容保公家臣飯沼貞吉および双方家族の人間愛物語と見えよう。

六、電信との出会い

貞雄は明治五年（一八七二）八月二六日に工部省（後

に工部省から分離された通信省勤務となる）の電信寮技術等外見習い下級として任官され、以後電信の道一筋に生きた。貞雄と電信の出会い、どこにあったのか？これが、本稿の最重要テーマである。

『陣中日記』（文献⑭）の中に気になる一行がある。明治元年十月十五日 晴れ 呼頂原屋、書籍数部を得る。（『陣中日記』より）（図14）

この時、頼三は本屋を呼んで書籍を何冊か入手した。二月に東山道先鋒の任についてから八ヶ月、各地を転戦し、会津を攻め落としてその任務をほぼ完遂した時期である。この間は戦争に明け暮れ書籍を入手するどころか、本を読む時間もなかったことだろう。

東京に凱旋して直ぐに日本橋の本屋に声をかけた。「頂原屋」は「須原屋」の間違いで、当時須原屋という大手の本屋が日本橋にあったことが確認されている。

本屋は慶応二年（一八六六）に初出版された当時のベストセラー『西洋事情』（文献②④）を持って来たとはいえない。著者の福沢諭吉は、万延元年（一八六〇）から文久三年（一八六三）に米国に二度、欧州に一度渡航しており、当時最も海外経験の豊富な日本人の一人であった。

頼三は落ち込んでいた貞吉に、『西洋事情』を手渡

（生年）である（文献①）。

わが国の電信（今の電報）創業は、明治二年（一八六九）一二月の東京築地―横浜裁判所間三二kmの開設に始まる。明治三年八月には東京―長崎間一三四〇kmの開通に着手した。貞雄の最初の赴任地は明治五年一〇月、下関で、正に我が国の電信の黎明期であり、若い貞雄を夢中にさせるだけの魅力があったと言える。

貞雄はその生涯すべてを電信に捧げた。中でも会津美里町で蒲生氏郷公の時代から四〇〇年に亘って陶器用に特産されてきた素焼きの会津碍子を電信用碍子として再開発し、日清戦争時にこれを朝鮮に敷設する責任者となり、命がけで成功させた。詳細は文献①「会津本郷焼電信用碍子と我が国の通信近代化」に記した。日清戦争向けに政府は約五万個の会津碍子を調達し、釜山から平安道（現北朝鮮）までの全長約六〇〇kmに約四カ月で敷設した。敵に先回りして情報を伝達できたため、これが日清戦争勝利の「影の立役者」現代流に言えば「ゲームチェンジャー」になったのである。通信同窓会編『通信教育史』創始期（文献②⑤）三七ページには次のように記載されている。

- 電信技師としての飯沼は①「電線路建築の測量法」②「磁石式並列複式交換機工事の実施」③「会津碍

子の採用」等の功績を残した。なお、①は電線路建築に適した独自の測量法を開発・導入することで正確かつ効率的な電線路の敷設を可能にし、我が国の通信網の整備を加速させた。②は複数の電話線を手動式の交換機より効率的に接続する機器の開発と設置で、後に自動交換機に発展し、我が国の通信レベルを世界水準に引き上げる一助となった。なお、貞雄は日露戦争では功績として勲五等瑞宝章、雙光旭日章及び金四百円を賜った。

七、高見家口伝の追加

高見家にはもう一つ言い伝えがあるという。それは、貞雄が美祢の檜崎屋敷を離れ、東京で通信省に入省した後で、世話になったお礼のために「再度檜崎屋敷（当時は高見総本家）を訪ねた」ことである。高見家はこの地の一番奥の高台にあり、集落全体が眼下に一望できる。左側の山裾の道は萩から嘉木峠を経て檜崎の殿様が貞吉を連れてきた道。右側の坂道は植松から下関に繋がる道。高見フサの玄孫吉井克也氏によれば、貞雄は一泊し、翌日植松に向かう坂道で手を振りながら帰っていった。「高見家の者はみんな庭先に出て、貞雄を見送った」という。



図24 美祢市小杉の檜崎屋敷跡をガイドする「恩愛の道」

の感謝の念を述べると共に通信省（当時は工部省）赤間関電信局に就職したことを報告、その後は思い出話に花が咲き、酒好きの貞雄は痛飲したことである。但し、この

貞雄が通信省に入省したのは明治五年（一八七二）八月二六日で、同年一〇月五日付けで赤間関（現在の下関）在勤の辞令が出ている。貞雄の最初の赴任地が下関になったのは純粹に役所の都合であり、当時の電信架設で下関が最優先だったからであろう。しかし、筆者は高見家の口伝に接した時からこの因縁が気になっていた。これまで筆者がこの逸話を封印してきた理由は「美談の上塗り」になるのを恐れたからである。しかし、これまでの調査の結果、貞雄はマツと二度に亘って会い「今自分があるのは頼三さんのお陰です」と律儀にお礼をしている。貞雄にとって高見家（特にフサ）は頼三と並ぶ恩義の対象である。筆者はこの逸話も嘘ではないと確信した。

美祢市小杉は下関と萩を結ぶ赤間関街道中道筋の途中にある。下関から小杉までは五四kmあり、徒歩で五〜七時間はかかる。日帰りは無理。貞雄はこの時、高見家に一泊した。なお、この街道は寛永時代（一六二四年）に下関と萩を結ぶ最短道として開設された。

貞雄はこの時二〇歳、首の傷跡は生々しく残っていたが、高襟の制服を着てこれを隠した。身長一七五cmの堂々たる姿に皆感動したと思われる。この時、どんな会話があったかは推して知るべしであるが、あの時

以上に述べてきたように、貞吉長州滞在説は十分な説得力をもつ。特に、筆者はNEC（日本電気株）の通信畑で三〇年に亘って研究開発に携わったので、貞雄が電信技術で身を立て、生きる目的を見出した背景がよく納得できるのである。当時の会津人にとって、官職と言えは教師か警察官ぐらいのモノである。明治五年に見習いとはいえ任官されたのは、檜崎屋敷で『西洋事情』などの書物と勉学の機会が与えられた賜物である。飯沼貞吉（貞雄）は飯盛山で自刃した白虎隊士の中で、唯一生き残ったという数奇な運命を辿った。さらに、あるうことか長州で養育されるという誰にも言えない秘密を背負って生きた。これを、単に「世にも珍しい出来事」で終わらせるか、後世に残すか。

山口県美祢市では、白虎隊の会・吉井克也下関支部長を中心に「恩愛の碑」という記念碑の建設に向けて、実行委員会が立ち上がった。背景には、長州と会津の友好を促進したいとの願いがあるのは勿論である。

二、恩愛の碑設置と序幕

平成二八年（二〇一六）一〇月一五日、雲一つない紺碧の青空の下で、全国各地から一一〇名を超える方々のご参加を頂き、長州藩士檜崎頼三・白虎隊士飯

第六章 檜崎屋敷跡に恩愛の碑 建設し序幕

一、貞吉長州滞在の意義と恩愛の碑

時自刃騒ぎについては誰も口にしなかったであろう。また、密書事件については何も言わなかったはずである。高見家の口伝に檜崎家の情報が全くないのはこのためであろう。

現地には高見家が見送った道に「恩愛の道」という名前が付いている（図24）。

一方、飯沼貞吉は二〇ページに及ぶ『白虎隊顛末記』という手記を残し、「自刃の事」について、「決して城落たるにあらず」と落城を否定したうえで、自刃理由は「武士の本分を明らかにする」と明記した。

当時の会津藩から見れば（例えば文献⑳）、会津は恭順を示したにも関わらず「朝敵・国賊という濡れ衣」を着せられた理不尽が許せないのである。会津の忠誠については孝明天皇が松平容保公にしたためた『ご宸翰』（天皇直筆の手紙）が証明している（文献㉔）。

一方、長州藩は「錦旗の捏造」という禁じ手を使った。他のどの藩よりも天皇に忠誠を尽くした会津としては「錦旗の捏造」など畏れ多くて考えられないこと

れるであろう。

なお、日露戦争で大量の戦死者を出した明治三八年（一九〇五）には「霰あられの如く乱れ来る敵の弾丸引き受けて、命を塵と戦いし三七の勇少年……」で知られる白虎隊文部省唱歌が制定され、国史教科書にも取り入れられ、全国の小学校であまねく教育された。白虎隊は皇国の犠牲の鑑かがみとして、太平洋戦争でも利用されたのである。

二、会津と長州

貞吉と同じ時期に長州藩士奥平謙輔の世話になった白虎隊士山川健次郎は、「奥平謙輔先生」と呼んでそ

会津と友好へ白虎隊碑

美祿に建立 隊士救つた逸話伝える



逸話伝える

戊辰戦争で敗れ、自刃を図った白虎隊の雄、の生者を自ら取り戻したと言いつける美奈保村厚保小村堤にこの伝承を記念する恩恵の碑が建たれた。

除幕が16日、地元行われ、長州藩主・白虎隊の子孫らに出席。去来の情をふる意へ、未だ亡き者の懐を撫る事を訴えた。(江口武志)

記念碑は熊鷹の御影石で作られ、縦約100センチ、横140センチ、厚さ約10センチ、重さは約700キログラムと推定されている。歴史学者、下間文部(一)「白虎隊の全隊市民権を構成する実行委員会が寄付し、約40万円がけり建てて、同支部として、白虎隊の家系として、白虎隊

白虎隊 会津藩が組織した部隊の一つ。16、17歳の男子よりなり、編成された。戊辰戦争では、新政府に戦い、飯坂山・福島县白井町で、敵士約40人を自刃を誇り、飯坂貞吉を除く言いがたった。

は、1868年、長州藩から来たのが、新政府軍の支援を受け、敗走。一部が刃を圖ったが、飯沼昌久(一854-1901年)が生き残り、小地区の主屋だった旧家から、長門藩士の梅田三二(一846-1917年)が、飯沼邸を訪れ、高見家に向いたと言いつた。

飯沼の世話をした。高見家の長子・吉井克也(同支那長・吉井克己と、80才)がこの家にいて訓蒙。

2008年、飯沼邸の一室に、東京と知り合った、吉井克己の墓碑を模して、吉井克己の墓を築き、吉井克己と呼ぶ名で昨年月、実葬式が殆どした。

実葬式には、一人元ふ兄弟姉妹、松永隆一(男、81)、東京、弟も参つた。

松永氏は、梅田昌久時、危険を冒す。畏死する者めずくに吉井守。松永が今日につながる。石を置きながら、二人の間を駆け回って、平和を求めたい。

吉井克己は「感謝」を感じたが、それが際限にあたり、今を知ってもらいたい。一円金でも作る。おぼろげな希望を託す。新たな一歩を踏み出す。新しい時代について話し。

図26 恩愛の碑序幕の新聞記事
(読売新聞2016年10月16日)



図25 恩愛の碑正面と背面

沼貞吉の「恩愛の碑」除幕式が執り行われた。

平成二三年（二〇一一）五月に、建立実行委員会を立ち上げ、足掛け五年、一一回に及ぶ準備会を開催し、全国約三八〇名の方々から浄財を頂き、立派な記念碑の建立に漕ぎつけた。総事業費五〇〇万円。なお、芳名版には松葉玲子様と檜崎建志様の刻銘もある。

この恩愛の碑は「長州藩士檜崎頼三と白虎隊士飯沼貞吉との間に交わされた怨讐を超えた人間愛」を後世に伝えると共に、会津・長州の友好にむけて役立つことに願いが込められた。そして、碑の裏に「祈 世界平和」の文字が刻まれた(図25・26)。

記念植樹では、会津からは「身知らず柿」を、山口からは「萩の夏みかん」を植えた。この二本の若木の成長とともに、会津・長州間の関係改善が進むことを参例者共々願いながら除幕式を終了した。

第七章 むすび

一、白虎隊の自刃を巡って

白虎隊士が飯盛山で自刃してから一五八年になる。会津白虎隊の悲劇は現在も忘れられることなく多くのメディアに登場する。しかし、問題は自刃理由の解釈

である。

会津は「ならぬことはならぬ」であるが長州は「目的のためには手段を選ばず」である。

即ち「武士の自分を明らかにする」とは「朝敵・国賊とされた理不尽に対する抗議の意思表示であり潔白の証」なのである（文献④『貞吉本』）。

自刃は簡単なことではない。古来より我が国の切腹には作法がある。自殺とは次元の違う行為である。自刃理由を「会津は朝敵にあらずという潔白の証」とするなら、泉下の白虎隊士はこれを「義」として受け入れるであろう。

なお、日露戦争で大量の戦死者を出した明治三八年（一九〇五）には「霰あられの如く乱れ来る敵の弾丸引き受けて、命を塵と戦いし三七の勇少年……」で知られる白虎隊文部省唱歌が制定され、国史教科書にも取り入れられ、全国の小学校であまねく教育された。白虎隊は皇国の犠牲の鑑かがみとして、太平洋戦争でも利用されたのである。

二、会津と長州

貞吉と同じ時期に長州藩士奥平謙輔の世話になった白虎隊士山川健次郎は、「奥平謙輔先生」と呼んでそ

の書を晩年まで自室に飾っていた。東大総長を努めた健次郎は少年期の異質文化との出会いがいかに大切かを深く認識していたのだろう。但し、これを開示したのは健次郎七三歳の晩年である（文献²⁷）。健次郎は藩の指示で奥平の元に走ったのであるから貞吉の場合とは事情が違うが、「長州の世話になった」ことに相違はない。要職にあった時期にはこれを世間に開示できなかったのである。貞雄は生涯長州滞在を明かさなかった。

会津と長州の壁は厚く友好は遅々として進まない。長州の「臨機応変」的発想と会津の「ならぬことはならぬ」という絶対規範は相反する理念で、価値観は対極と言ってもよい程の違いがある。そんな背景の中で、貞吉はかけがえのない体験をした。

まさに、「史実は小説よりも奇なり」である。歴史に「タラレバ」は禁物であるが、敢えてもしあの時（草加の長州藩本隊屋敷での頼三との対面場面で）、頼三が貞吉を切り捨てていたら、白虎隊の真相は闇の中、貞吉（貞雄）の出番はなく、日清・日露戦争にも影響が出たかも知れないし、筆者を含む飯沼家の存在も本稿も無かった。

るものなり」と記している。本書石版画とはこの本の冒頭に付けた白虎隊自刃の絵のことで、その容貌等はハツと貞雄の口述を基にして描いた。「故」とあるから、ハツは貞雄が中村に会った明治二十六年（一八九三）には亡くなっていた。中村は貞雄の口述を元に塩川の近江屋で貞吉が治療を受けるに至った状況を以下のように記述した。

塩川村の近傍に至り、氏の血色益々変じて見るに忍びず、医薬を求めんと老婦は村内を馳せ廻りしに、村内の百姓共各竹槍を携え、氏を取り囲み、狂狗の吠ゆるが如く賊よ敵よと叫び、氏は其の意を解すること能わず、今にも衝き殺されんとする勢いなり。老婦は図らざりき斯の如き事あらんと漸くその無礼を取り鎮め、一名の重立ちたるもの捕い、村の名主に迫り、其の故を問う。然るに、昨戦以来敵兵村内に乱入し、財宝を掠奪する事屢々なり。因て、塩川代官の達しもあり、此等のことより無礼に及びしならんと、名主は平身低頭して、其の罪を謝す。氏は歩行も為し難く、名主の計らいにて籠に乗り、夜に及んで塩川村なる近江亭に着し、（『事蹟』より）

この竹槍武装した村人に取り囲まれ窮地に陥った時のハツの機転と武勇伝は貞吉救出劇のハイライトで

貞吉の長州滞在が「長州と会津の友好」の架け橋の一つになってくれれば、大変有難いしそう願いたい。そのためにはお互いにその歴史的背景や真意を理解し合うことが必要である。友好の鍵は、お互いに「義」を重んじることだと思う。

頼三と貞吉は、共に「義」を大切にしたい人間関係だったと信じている。

三、貞雄が果たした恩義行動

本題から少し外れるが筆者には「おもむき文書」（文献²⁹）で、「飯沼家はお礼の葉書一枚も出さず恩義のひとつかけらも無い」という痛烈な非難を受けたことを忘れることができない。渡部佐平と息子の嫁ムメの関与については『貞吉本』（文献⁴）のp.69～72を参照していただくとして、貞吉には会津に少なくとも二人の命の恩人がいる。印出ハツと長岡藩軍医（阿部宗達と吉見雲台とされる）である。

筆者は貞雄が明治二十二年（一八七八）に山形出張の途中で会津に寄った時（文献¹）に印出家を訪ね、ハツに会って礼を述べたと考える。ハツについては『事蹟』に著者中村謙が「本書石版画の容貌・着衣の模様等は故印出の老母及び飯沼君の口述に基づき編纂した

あるが、「氏（貞吉のこと）は其の意を解すること能わず」、つまりこの場面で貞吉は意識朦朧だったと解釈できる。一方、ハツの武勇伝はあまりにも生々しく且、詳細を極める。貞雄はハツの自宅を訪ね、「あなたは私の命の恩人です」と繰り返し礼を述べた。一方、ハツはあの時の機転を利かせた行動を振り返りながら、貞雄の知らない武勇伝を語った。貞雄はその五年後にその内容を中村に口述したと言える。

なお、長岡藩軍医については筆者に心当たりがあるがここでは触れない。

結局貞雄は、明治五年（一八七二）に美祿で高見家に、明治八年（一八七五）に東京で豊資とマツに、明治二十二年（一八八八）に会津でハツに、明治二十六年（一八九三）に東京で再びマツに会って恩人へのお礼を述べたと思われる。

貞雄の墓は仙台市北山にある曹洞宗の輪王寺である。飯沼家も檜崎家も代々神道であるが貞雄墓が輪王寺となった経緯は、日清戦争で貞雄の電信架設隊の一員となった日向真寿見（白虎隊長日向内記の長男）の一周忌に「日向君招魂碑」を輪王寺の近くにある青葉神社に奉納した（明治二十九年（一八九六）三月）こと



図27 白金台の瑞聖寺（右）と萩の亨徳寺（左）

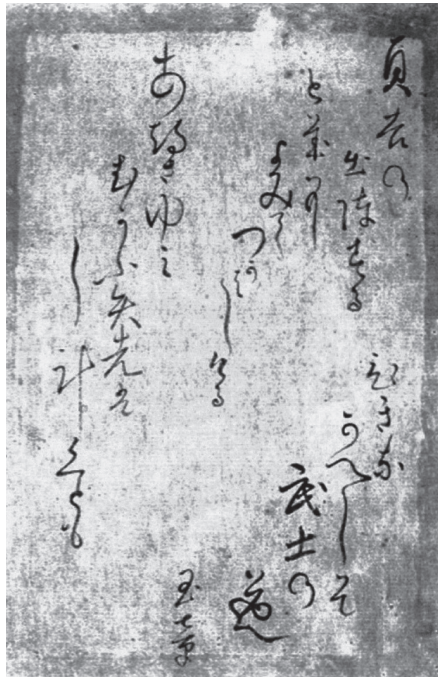


図28 母ふみが貞雄に贈った梓弓の色紙

と関係がある（文献④『貞吉本』）。

一方、頼三の遺髪と豊資の遺骨は共に港区芝白金台にある瑞聖寺に埋葬された。瑞聖寺は寛文一〇年（一六七〇）に創建された歴史と風格のある黄檗宗の禪寺である。

瑞聖寺の二人の墓は明治四五年（一九一二）に檜崎祥三の手によって萩市の亨徳寺に遷葬された（図27）。頼三の墓と檜崎家先祖代々の墓の二基があるが、亨徳寺もなぜか曹洞宗なのである。

筆者は貞雄が「二人の命の恩人と泉下で繋がっていたい」との思いから曹洞宗の輪王寺との繋がりを深めたものと考えている。

四、梓弓の歌

最後に筆者が長い間、気になっていた問題について記したい。それは梓弓の歌の本当の意味は何かである。梓弓向ふ矢さきはしげくとも

引きな返へしそ武士の道

玉章

この歌は貞吉が出陣する際に、母ふみが短冊にしたため軍服の襟に縫い込んでいたものではなむけとしたものである。当時の会津藩は戦力で圧倒的に劣るので、これは「潔く死んできなさい」とも解釈できる。貞吉が自刃に失敗して不動堂で傷を癒していた時には、母が諫めた（注意したという意味）「引き返してはならない」に反して引き返してしまい、あぐくの果てに、自分だけ「生き残ってしまった」ことを悔やんだのである。

ところが、明治二八年（一八九五）に貞雄が日清戦争で朝鮮から凱旋して帰国した時に、ふみは梓弓の歌を色紙に書いて貞雄に贈ってきた。図28にこの色紙を示す。

出陣の際に贈った梓弓の歌が、軍功の祝に贈られてきた。日清戦争では戦力差は少なかったであろうが、この歌の意味が「潔く死んできなさい」では辻褄が合わない。もっと深い意味があるはずである。あらためて調べてみると、梓弓は弓にかかる枕言葉（引くなど）であるが、梓という木で作った弓で、神事などで

巫女が霊を呼び寄せ魔除けに用いられていたとある。

また、「むこう矢先はしげくとも」は「目標が如何に達成困難でも」という意味で、「ひきな返しそ」は「引き返してはならない」に加えて「弓を引いては必ず返す」つまり、「目標を達成するまで固い決意で突き進む」という意味もある（そはその強調）。要約すると、「武士道における不屈の精神、どんな困難にも立ち向かう」姿勢を強調した歌と解釈できるという。ふみがこのタイミングで色紙を贈った意図は、「貞、よくやったね」という祝福なのである。この頃、歌に興味を深めた貞雄は梓弓に込められた母の真意をあらためて理解したと思われる。

この色紙には歌人らしい見事な字配りで「貞吉の出

陣するとき、詠みてつかわけしける」と追記してある。

この年の明治二八年末、日清戦争の功により、貞雄は勲七等に叙せられ、青色桐葉章及び年金六〇円を賜った。この時、ふみが詠んだお祝いの歌がある。

（貞雄軍功により年金賜ひし折）

名にしほふ 都の春に咲やこの

花の匂は つきせざりけり

玉章

貞雄が朝鮮出征中には母ふみ宛に、歌の指導を願った手紙が残っている。

明治二七年洛東ト申ス所ニ至リ、平壤ノ我軍大勝利ノ電報アリ。此ノ夜ハ月見ノ節句ナルヲ思ヒ出テ、左ノ一首ヲ得タリ。

神風の 吹きよすかきり 雲晴れて

さやかにうつす こと国の月

貞雄

何卒御直シ頂ダケレバ、有難キ候。

新年を迎ふるときよめる。

乗る駒に ふる白雪を花と見て

八千代を祝ふ異国の春

貞雄

右、御直シ頂キタク候。八千代とアルハ、君が代ノ意ニ有之候。

貞雄は晩年和歌をたしなんだ。

大正一三年（一九二四）八月に、皇太子殿下（後の

昭和天皇）が飯盛山に行啓された。朝敵・国賊として差別され続けてきた会津、その会津の象徴とも言える飯盛山白虎隊墓碑を天皇家が公式に参拝されたのである。

山川健次郎は会津を代表する一人として、ご一行のお側近くでお供をしていたが、貞雄にその時の様子を伝えた手紙が残っている。

中略……戊辰の年、貞吉君が白虎隊士として出陣した折、叔母上様がお贈りになった歌を、先頃、両殿下が飯盛山へ行啓なされた際に、大尉某が口にしたのですが、（両殿下は）実際に（その歌を）お詠みになり、「（貞吉に）贈ることになったとは」と涙され、この歌のことをご記憶になっていたそうです。

大正一三年八月二七日 健次郎

これを受けて貞雄は「日の御子」の歌を詠んだ。

日の御子の 御影あおぎて 若桜

散りての後も 春を知るらん （孤舟）

日の御子は皇太子殿下、若桜は飯盛山で自刃した白虎隊の戦友たちのことである。泉下の戦友たちとこの喜びを分かち合いたいという切ない気持ちが伝わってくる。

筆者は貞雄の歌の中でこの歌が一番好きであるが、



PROFILE

飯沼 一元
いぬま かずもと

朝鮮での歌に比べると上達しているのが分かる。なお、「日の御子」の歌碑は飯盛山の貞雄の墓の隣にある。貞雄が詠んだ歌をもう一首紹介しておこう。
をきなとき 母の衣ぬふかたはらに
ふみよみし夜は 樂しかりしか 貞雄
「ふみ」は母の名と、書をかけてある。子供の頃、夜なべしてせつせと繕いものなど針仕事をする母の傍らで、四書などの勉強に励んでいる親子の情景が眼に浮かんでくる。なお、この二年後の明治三〇年（二八九七）八月ふみが死亡し、葬儀に駆け付けた貞雄は集まった家族の前で大泣きする（『貞吉本』）。
最後に、本稿を纏めるに当たって、多くの友人・知人のご協力をいただいた。ここに深く感謝の意を表します。

1943年、仙台市生まれ。蘇生白虎隊士飯沼貞吉（後貞雄）の直系の孫（貞雄二男一精の三男）。1961年、宮城県立仙台第一高等学校卒。1965年、東北大学工学部電子工学科卒。1970年、東北大学で工学博士号取得。同年、日本電気（株）へ入社。通信研究部でMPEGの基本特許発明。後、研究所長、本社理事支配人。2003年、（株）ライステックを設立し代表取締役。米ぬか健康食品のベンチャー事業に携わる。2010年4月、白虎隊の会設立。会長。2011年7月、海の会設立。東日本大震災被災学生に奨学金支給支援。
著書
『白虎隊士飯沼貞吉の回生』『ニューロコンピュータ』他

参考文献

文献①「会津本郷焼電信用碍子と我が国の通信近代化」飯沼一元 令和6年8月20日 『会津人群像No.48』P 57～96 歴史春秋社

文献②「飯沼貞吉長州滞在説の検証」飯沼一元 平成28年 『会津史談第90号』P 91～108 会津史談会

文献③『愚直に生きた（下）』伊藤哲也 令和6年 P 196～197 歴史春秋社

文献④『白虎隊士飯沼貞吉の回生第2版』飯沼一元 2013年3月15日 ブイツーソリューション

文献⑤『白虎隊事蹟』飯沼貞雄君の事蹟 中村謙 明治27年 河井源蔵編 国会図書館

文献⑥『会津戊辰戦争』平石弁蔵増補版 昭和2年12月5日 P 281 丸八商店出版部

文献⑦『戊辰會津戦争回想談其二』河原勝治 昭和3年 『会津会雑誌32号』

文献⑧『飯沼貞吉』佐藤一男 幕末・会津藩士銘々伝 2004年7月20日 P 35～36 小松山六郎、間島勲 新人物往来社

文献⑨『河北新報白虎隊実歴談七』國分坊著 河北新報 明治43年7月4日

文献⑩「飯沼貞吉の生涯」飯沼一元 2010年3月2日 『会津人群像No.16』P 71 歴史春秋社

文献⑪『会津少年郡長正 自刃の真相』宇都宮泰長 平成15年8月15日 P 189～201 鵬和出版

文献⑫『藻汐艸』飯沼関弥自叙伝 私家版 昭和13年 P 4

文献⑬『会津戊辰戦史』会津戊辰戦史編纂会 飯沼関弥 昭和8年8月1日 P 314

文献⑭『橋崎頼三陣中日記』橋崎頼三 明治元年 橋崎豊資による写本は明治22年 私家版

文献⑮『流れる五戸川続9（おらが村の会津様）』三浦栄一 平成10年10月10日 P 96 青森コロニー

文献⑯『恩愛の絆』堀田節夫 平成9年 『蒙談第24号、25号』蒙談会

文献⑰『文部大臣 高見三郎傳 小杉の巻』浦上豊 昭和56年 私家版

文献⑱「飯沼貞雄と橋崎頼三のこと」金本利雄 平成9年 『蒙談第24号、25号』蒙談会

文献⑲「飯沼貞吉と橋崎頼三」土屋貞夫 2010年3月2日 『会津人群像No.16』P 48～50 歴史春秋社

文献⑳『ある明治人の記録』石光真人 昭和46年 中央公論社

文献㉑『公爵桂太郎傳』徳富猪一郎 大正6年

文献㉒『歴代小傳』橋崎祥三 私家版 大正12年 松葉玲子様保有

文献㉓『美祢博物館研究報告書』道迫真吾 2011年3月30日 P 3

文献㉔『福沢諭吉著作集 第一巻 西洋事情』福沢諭吉 平成14 慶応義塾大学出版会

文献㉕『通信教育史』通信同窓会編 昭和59年6月 P 37 創始期、国会図書館デジタルコレクションKEYWORD飯沼貞雄

および『出久根達郎の人に言葉あり32』信濃毎日新聞 2016年10月5日

文献㉖「白虎隊」石田明夫・飯沼一元 2019年10月29日 『会津人群像No.39』P 17～19 歴史春秋社

文献㉗『山川家の兄弟』中村彰彦 2005年11月21日 人物文庫 P 168～177 学陽書房

文献㉘『白河踊』中原正男 2017年12月1日 P 33 西日本新聞印刷

文献㉙「飯沼貞吉救助の実証を追って」秋月一江 1977年5月20日 『会津史談第50号』P 137～150